

16  
26

朝 香 園 泉 宗				
2 册	16 号		2 架	西 属 類

大日本租稅志







子代ノ民處々ノ屯倉及ヒ別臣連伴造國造村首ノ有  
 ツ所ノ部曲ノ民處々ノ田莊ヲ罷メ仍テ食封ヲ大夫  
 以上ニ賜フ各差降有リ日本書紀

〔百雉五年正月五日〕紫冠ヲ以テ中臣鎌足連ニ授ケ封  
 若干戸ヲ増ス日本書紀

〔按〕大織冠傳ニ云孝徳天皇大化元年詔シテ曰ク  
 社稷安ヲ獲ルハ定ニ公ノ力ニ頼ル車軌ヲ同フ  
 スルハ抑又此祭ナリ仍テ大錦冠ニ拜シ内臣ヲ  
 授ケニ千戸ニ封シ軍國ノ機要公ノ處分ニ任ス  
 自鳳五年八月詔シテ曰ク其レ大錦冠内臣連ノ  
 功建内宿禰ニ侔シ紫冠ニ超拜シ八千戸ヲ増封  
 ス云々是ニ於テ海ニ航シ山ニ梯シ朝貢絶ニ非  
 域ヲ三チ腹ヲ鼓ツ郷里稍多シ君理ニ臣賢ニ非  
 スンテ何ソ茲ノ美ヲ致サンヤ故ニ大紫冠ニ遷  
 シ爵ヲ進テ公ト爲シ五千戸ヲ増封ス前代後并  
 テ凡ソ一萬五千戸後天智天皇八年大織冠ヲ授  
 ケ内大臣ニ任シ姓ヲ改テ藤原朝臣トナス

〔七月廿四日〕西海使吉士長丹等百濟新羅ノ遣使ト共  
 ニ筑紫ニ泊ス是月西海使等唐國ノ天子ニ奉對シ多  
 ク文書寶物ヲ得ルヲ褒美シ小山上大使吉士長丹ニ  
 授クルニ小華下ヲ以テシ封ヲ賜フコト二百戸姓ヲ  
 賜テ吳氏ト爲ス日本書紀

〔天武天皇五年四月十四日〕勅諸王諸臣ニ給ハル封戸  
 ノ稅ハ西國ヲ除キ相易ヘテ東國ニ給ヘ日本書紀

〔八月二日〕親王以下小錦以上ノ大夫及ヒ皇女姬王内  
 命婦等ニ食封ヲ給フコト各差アリ日本書紀

〔六年五月三日〕勅シテ大博士百濟人率丹ニ大山下ノ  
 位ヲ授ケ因テ以テ三十戸ニ封ス倭畫師音檮ニ小山



皇太子ノ上原  
ト天字アリ集  
解ノ考ニ據テ  
剛ル

藤原鈔後附ニ  
云天武天皇十  
四年正月即位  
ノ號ヲ改メ明  
大一明廣一明  
大二明廣二淨

大日本書紀卷之八

下ノ位ヲ授ケ乃チ二十戸ニ封ス日本書紀

〔十年正月十一日〕勅シテ境部連石積ヲ六十戸ニ封ス日本書紀

日本書紀  
類聚國史

〔朱鳥元年八月十三日〕皇太子大津皇子高市皇子ニ各

封四百戸ヲ加ヘ川島皇子忍壁皇子ニ各百戸ヲ加フ

日本書紀

〔十五年〕芝基皇子磯城皇子ニ各二百戸ヲ加フ日本書紀

〔持統天皇五年正月十三日〕皇子高市ニ二千戸ヲ増封

ス前ニ通シテ三千戸淨廣二皇子穗積ニ五百戸淨大

參川島ニ百戸前ニ通シテ五百戸正廣參右大臣丹比

島真人ニ三百戸前ニ通シテ五百戸正廣肆百濟王禪

大一淨廣一淨  
大二淨廣二淨  
大三淨廣三淨  
大四淨廣四正  
大一正廣一正  
大二正廣二正  
大三正廣三正  
大四正廣四直  
大一直廣一直  
大二直廣二直  
大三直廣三直  
大四直廣四動  
大一動廣一動  
大二動廣二動  
大三動廣三動  
大四動廣四務  
大一務廣一務  
大二務廣二務  
大三務廣三務  
大四務廣四退  
大一退廣一退  
大二退廣二退  
大三退廣三退

廣ニ百戸前ニ通シテ二百戸直大一布勢御主人朝臣

ト大伴御行宿禰トニ八十戸前ニ通シテ三百戸其餘

封ヲ増スコト各差有リ日本書紀

〔六年正月四日〕皇子高市ニ二千戸ヲ増封ス前ニ通シ

テ五千戸日本書紀

〔七年三月五日〕大學博士勸廣ニ上村主百濟ニ食封三

十戸ヲ賜フ以テ儒道ヲ優スルナリ日本書紀

〔十一月廿三日〕直大肆ヲ以テ直廣肆引田朝臣少麻呂

ニ授ケ仍テ食封五十戸ヲ賜フ日本書紀

〔八年正月二日〕正廣肆ヲ以テ直大一布勢朝臣御主人

ト大伴宿禰御行トニ授ケ封ヲ増スコト人コトニ二

大日本書紀

卷之八

三

大藏省



大田進廣四進  
大一進廣一進  
大二進廣二進  
大三進廣三進  
大田進廣四進

〔氏〕天智紀ニ  
氏上ヲコノカ  
ミトヨミ天武  
紀ニ氏長ト見  
ユ後世ノ氏ノ  
長者ナリ

百戸前ニ通シテ五百戸並ニ氏ノ上下爲ス日本書紀  
〔文武天皇大寶元年七月廿一日〕親王以下ニ勅シ其官  
位ニ准シテ食封ヲ賜フ又壬申ノ年ノ功臣功第ニ隨  
テ亦食封ヲ賜フ並ニ各差アリ又勅ス先朝功ヲ論シ  
封ヲ行フ時村國小依ニ百二十戸當麻公國見縣犬養  
連大侶板井連小君書直知德書首尼麻呂黃文造大伴  
大伴連馬來田大伴連御行阿倍普勢臣御主人神麻加  
牟隨君兒首十一人ニ各一百戸若櫻部臣五百瀬佐伯  
連大目牟宜都君比呂和爾部君手四人ニ各八十戸ヲ  
賜フ凡ソ十五人賞各異ナリト雖モ而モ同ク中第ニ  
居ル宜ク令ニ依テ四分ノ一ハ子ニ傳フヘシ又皇大

〔漢〕新解ニ云紀  
夫人嬪竝ニ皆  
天子ノ嬪ナリ  
又云嬪ハ婦人  
ノ法度アル者  
ノ稱ナリ

妃内親王及ヒ女王嬪ノ封各差アリ續日本紀  
〔廿七日〕太政官處分ス功臣ノ封ハ應ニ子ニ傳フヘシ  
若シ子無キハ傳フルコト勿レ但兄弟ノ子ヲ養フテ  
子ト爲ス者ハ傳フルコトヲ聽ルセ其封ヲ傳フルノ  
人亦子無ケレハ更ニ養子ヲ立テ轉シテ之ヲ授クル  
コトヲ聽ルセ其世葉ヲ計ルハ一ニ正子ニ同フセヨ  
但嫡孫ヲ以テ繼ト爲スハ封ヲ傳ルコトヲ得サレ日本書紀

〔按〕嫡孫承祖ノ事若シ之ヲ忽ニセハ功臣ノ封世  
數ニ差等有ルモ其實ヲ失フコト至ル故ニ嚴ニ  
此制ヲ立ツ延喜ノ文亦之ニ同シ共一  
時ノ法ニ非サルコト知ルヘキナリ

〔八月七日〕是ヨリ先キ大倭國忍海郡ノ人三田首五瀬



〔大上天皇〕持統天皇ナリ

ヲ對馬島ニ遣シテ黄金ヲ治成セシム是ニ至テ詔シテ五瀬ニ正六位上ヲ授ケ封五十戸田十町ヲ賜フ又贈右大臣大伴宿禰御行首五瀬ヲ遣シテ金ヲ治セシム因テ大臣ノ子ニ封百戸田四十町ヲ賜フ續日本紀類聚國史

〔三年十一月〕太上天皇行シテ尾張國ニ至リ國守從五位下多治比真人水守ニ美濃國ニ至リ國守從五位上石河朝臣子老ニ伊勢國ニ至リ國守從五位上佐伯宿禰石湯ニ各封一十戸ヲ賜フ續日本紀

〔令〕凡ソ封戸ハ皆課戸ヲ以テ充テヨ調庸ハ全ク給ヘ其田租ハ二分ト爲シテ一分ハ官ニ入レ一分ハ主ニ給ヘ賦役令

〔正〕錢解ニ據ルニ絹綿長サ五丈二寸廣サ二尺二寸ヲ正ト爲ス

〔屯〕同書ニ云綿二斤ヲ屯ト曰フ

〔端〕同書ニ據ルニ布長サ五丈

凡ソ食封ハ一品ニ八百戸二品ニ六百戸三品ニ四百戸四品ニ三百戸内親王ハ半ヲ減セヨ太政大臣ニ三千戸左右大臣ニ二千戸大納言ニ八百戸若シ理ヲ以テ解官シ及ヒ致仕スル者ハ半ヲ減セヨ正一位ニ三百戸從一位ニ二百六十戸正二位ニ二百戸從二位ニ一百七十戸正三位ニ一百卅戸從三位ニ一百戸其五位以上ハ食封ノ例ニ在ラス正四位ニ綿十疋綿十屯布五十端庸布三百六十常從四位ニ綿八疋綿八屯布卅三端庸布三百常正五位ニ綿六疋綿六屯布卅六端庸布二百卅常從五位ニ綿四疋綿四屯布廿九端庸布一百八十常女ハ半ヲ減セヨ其故無シテ上ヘサルコ



二尺廣サ二尺  
四寸ヲ端ト爲  
ス  
〔常〕同書ニ云布  
一丈三尺ヲ常  
ト爲ス  
〔約〕同書ニ云絲  
十六兩ヲ約ト  
曰フ

大日本通記卷之八  
天保九年  
一州編錄

ト二年ナラハ則チ給フコトヲ停メヨ中宮ノ湯沐ハ  
二千戸東宮ノ一年ノ雜用料ハ絁三百疋綿五百屯糸  
五百約布一千端鐵一千口鐵五百廷令  
〔按〕義解ニ云兼テ封祿ノ爲ニ例ヲ立ルナリ職封  
ハ此例ニ入ラス但理ヲ以テ官ヲ解クモノ服闋  
リ及ヒ病差ルノ後故無クシテ上ヘサルコト一  
年ナレハ選叙令ニ准シテ給フコトヲ停ム共在  
任ノ官ハ上ヘサルコト百廿日ナレハ亦給  
ハサルナリト以テ其別ヲ觀ルヘキナリ  
凡ソ嬪以上ハ竝ニ品位ニ依テ封祿ヲ給ヘ令  
〔按〕義解ニ云減半セサルコトヲ顯サント欲ス故  
ニ品位ニ依ルト云フト蓋シ女ニ給フコト概テ  
男ヨリ減ス嬪以上ハ故  
ラニ之ヲ優ニスルナリ  
凡ソ五位以上以下功ヲ以テ封ヲ食ム者其身亡スレ  
ハ大功ハ半ヲ減シテ三世ニ傳ヘヨ上功ハ三分ノ二

ヲ減シテ二世ニ傳ヘヨ中功ハ四分ノ三ヲ減シテ子  
ニ傳ヘヨ男女同シ下功ハ傳ヘス令  
凡ソ令條ノ外ニ若シ特封及ヒ増スコト有ラハ竝ニ  
別勅ニ依レ令  
〔慶雲元年正月十一日〕三品長親王舍人親王穗積親王  
三品刑部親王ニ各二百戸三品新田部親王四品志紀  
親王ニ各一百戸右大臣從二位石上朝臣麻呂ニ二千  
一百七十戸大納言從二位藤原朝臣不比等ニ八百戸  
ヲ益封ス自餘三位已下五位已上十四人各差有リ日  
紀本  
〔十六日〕御名部内親王石川夫人ニ詔シテ封ヲ益スコ

大日本通記卷之八  
天保九年  
一州編錄



ト各一百戸 續日本紀

三年四月十七日勅官員令ニ依ルニ大納言四人職掌  
既ニ大臣ニ比ス官位モ亦諸卿ニ超タリ朕之ヲ念フ  
ニ任重ク事密ニシテ充員滿チ難シ宜ク二員ヲ廢省  
シテ兩人ト爲シ定メ更ニ中納言三人ヲ置キ以テ大  
納言ノ不足ヲ補フヘシ其職掌ハ敷奏宜旨待問參議  
其官位ノ料祿ハ令ニ准シ商量シテ施行セヨ太政官  
議奏ス其職大納言ニ近フシテ事機密ニ關ス官位ノ  
料祿ハ便チ輕クスヘカラス請フ其任ヲ正四位上ニ  
擬シ官別ニ封二百戸資人三十人トセント之ヲ可ス  
續日本紀

十一月四日詔シテ親王諸臣ノ食封ヲ加フルコト各  
差アリ是ヨリ先キ五位ハ食封アリ是ニ至テ代フル  
ニ位祿ヲ以テス 續日本紀

三年二月十六日詔令ニ准スルニ三位以上已ニ食封  
ノ例ニ在リ四位以下寔ニ位祿ノ物アリ又四位飛蓋  
ノ貴キ有テ五位冠蓋ノ重キ無シ應ニ有蓋無蓋同ク  
位祿ノ例ニ在ルヘカラス故ニ四位宜ク食封ノ限ニ  
入ルヘシ又令ヲ案スルニ諸王諸臣ノ位封正一位三  
百戸ヨリ差降シテ從三位一百戸ニ止ル冠位已ニ高  
クシテ食封何ソ薄キ宜ク正一位六百戸ヨリ差降シ  
テ從四位八十戸ニ止ルヘシ 續日本紀

大日本皇朝本紀 卷之八 七 大正



〔藤原朝臣不比等ナリ〕

〔命禮〕命禮解ニ云内命禮ハ五位以上ノ夫人ヲ附フ外命禮ハ五位以下ノ妻ヲ附フ

〔四年四月十五日〕詔シテ藤原朝臣ニ食封五千戸ヲ賜フ辭シテ受ケス三千戸ヲ減シテ二千戸ヲ賜ヒ一千戸ハ子孫ニ傳フ又詔シテ封ヲ益スコト親王己下四位己上及ヒ内親王諸王嬪命婦等各差アリ續日

〔元明天皇和銅七年正月三日〕二品長親王舍人親王新田部親王三品志貴親王ニ封ヲ益スコト各二百戸從三位長屋王ニ一百戸封租全ク給フ其食封ノ田租全ク封主ニ給フコトハ此ヨリ始ル續日本紀

〔按是ヨリ先キ封戸ノ調庸ハ其主ニ賜ヒ其租ハ折半シテ公私ニ分ツ是ニ至テ全ク其主ニ給フナリ〕

〔十六日〕二品氷高王ニ食封一千戸ヲ益ス續日本紀

〔閏二月朔日〕美濃守從四位下笠朝臣麻呂ニ封七十戸ヲ賜フ續日本紀 ○事功田餘中ニ具レリ

〔靈龜元年正月十一日〕三品泉内親王四品氷主内親王長谷部内親王ニ封各一百戸ヲ益ス續日本紀

〔元正天皇養老元年十月十八日〕正三位阿部朝臣宿奈麻呂正四位下安八萬王從四位下酒部王坂合部王智努王御原王百濟王良虞中臣朝臣人足等ニ封ヲ益スコト各差アリ續日本紀

〔三年十月十七日〕詔開闢已來法令尙シ君臣位ヲ定メテ運屬スル所有リ云々一品舍人親王ニ内舍人二人大舍人四人衛士三十人ヲ賜ヒ益封八百戸前ニ通シ

〔舍人〕和訓ニ據ルニトチソ刀爾スノ義中ニ宿直シ守



藤スル人ヲ謂  
フ又日本紀ニ  
近習舍人ト見  
ニ帳内兵衛ナ  
トヲ謂セリ  
〔五月〕恐クハ五  
百戸ノ誤ナラ  
シ

テ二千戸二品新田部親王ニ内舍人二人大舍人四人  
衛士二十人ヲ賜ヒ益封五戸前ニ通シテ一千五百戸  
續日本紀  
扶桑略記

〔聖武天皇神龜元年二月四日〕一品舍人親王ニ封五百  
戸ヲ益シ二品新田部親王ニ一品ヲ授ケ從二位長屋  
王ニ正二位正三位多治比真人池守ニ封五十戸ヲ益  
シ從三位巨勢朝臣色治大伴宿禰多比等藤原朝臣武  
智麻呂藤原朝臣房前ニ竝ニ正三位竝ニ封ヲ益ス  
日續  
本紀

〔四年十一月廿一日〕從三位藤原夫人ニ食封一千戸ヲ  
賜フ  
日續  
本紀

〔告人〕左大臣長  
屋王私ニ左道  
ヲ學テ國家ヲ  
顧ント欲スル  
ヲ告ルナリ

〔天平元年二月廿一日〕告人漆部造君足中臣宮庭連東  
人ニ竝ニ外從五位下ヲ授ケ封三十戸田十町ヲ賜フ  
日續  
本紀

〔九年十月七日〕民部卿正三位藤原朝臣房前ニ正一位  
左大臣ヲ贈リ竝ニ食封二千戸ヲ其家ニ賜フ限ルニ  
二十年ヲ以テス  
日續  
本紀

〔十一年五月晦日〕詔諸家封戸ノ租ハ令ニ依テ二分ハ  
官ニ入レ一分ハ主ニ給フ自今以後ハ全ク其主ニ賜  
ヘ運送ノ備食ハ其租ヲ割キ取レ  
日續  
本紀

〔十三年正月十五日〕故太政大臣藤原朝臣ノ家食封五  
千戸ヲ返上ス二千戸ハ舊ニ依リ其家ニ返シ賜フ三



千戸ハ諸國ノ國分寺ニ施入シ以テ丈六ノ佛像ヲ造ルノ料ニ充ツ續日本紀

〔十六年八月五日〕詔シテ蒲生郡ノ大領正八位上佐々

貴山君親人ニ從五下ヲ授ケ竝ニ食封五十戸ヲ賜フ

紫香樂宮邊ノ山木ヲ伐除ス故ニ此賞アリ續日本紀類聚國史

〔十九年五月三日〕太政官奏シテ曰ク封戸ノ人數多少

有ルニ緣リ輸ス所ノ雜物其數等シカラス是ヲ以テ

官位同等ナレトモ給フ所差ヲ殊ニス法ニ於テ准量

スルニ理實ニ堪ヘス請フ一戸毎ニ正丁五六人中男

一人ヲ以テ率ト爲シ則チ郷別ニ課口二百八十中男

五十ヲ用テ擬シテ定數ト爲シ其田租ハ一戸毎ニ四

〔舊〕原書既ニ作ル今延喜式ニ據テ之ヲ改ム

十束ヲ以テ限ト爲シ加減スヘカラスト之ヲ可ス日續

紀本

〔按〕是ヨリ先キ封戸ニ率無シ今其率ヲ奏可ス復來延喜ニ至テ復々正丁四人中男一人ヲ以テ一戸ノ課トス以テ其浴軍ヲ見ルヘキナリ

〔淳仁〕天皇天平寶字二年八月廿五日紫微内相藤原朝

臣仲麻呂ヲ以テ大保ニ任ス勅シテ曰ク善ヲ褒メ惡

ヲ懲スハ聖主ノ格言績ヲ賞シ勞ニ酬ルハ明主ノ彝

則ナリ其レ藤原朝臣仲麻呂ヲ大保ニ任シ云々更ニ

功封三千戸功田一百町ヲ給フテ永ク傳世ノ賜モノ

ト爲シ以テ不常ノ勳ヲ表セヨ續日本紀

〔四年八月八日〕勅子ハ祖ヲ以テ尊ヲ爲シ祖ハ子ヲ以



〔大公〕考證ニ云  
 永正金澤堀諸  
 本及ヒ紀略皆  
 大ノ上齊ノ字  
 アリト齊大公  
 望ハ周ノ功臣  
 ニシテ管公ニ  
 封セラル  
 〔尚侍〕女官ナリ  
 職員令ニ云常  
 侍奏問宣傳女  
 希ヲ檢校シ能  
 ナ内外命婦ノ  
 朝參ヲ知リ及  
 ヒ禁内ノ禮式  
 ノ事ニ供公ス  
 ルヲ掌ル  
 〔尚書〕女官ナリ

尚書ニ云神  
 關製供御ノ衣  
 服中袴服既及  
 ヒ珍寶絲帛皆  
 關ノ事ヲ掌ル

テ亦貴シ此レ則チ不易ノ彝式聖主ノ善行ナリ其レ  
 先朝ノ太政大臣藤原朝臣ハ唯功天下ニ高キノミニ  
 アラス是レ復々皇家ノ外戚ナリ云々宜ク太公ノ故  
 事ニ依リ追テ近江國十二郡ヲ以テ封シテ淡海公ト  
 爲スヘシ續日本紀  
 〔十〕二月十三日勅令ニ准シテ封戸ヲ給フ專女ハ悉ク  
 半ヲ減ス今尚侍尙藏ハ職掌既ニ重シ宜ク諸人ニ異  
 ナルヘシ量テ須ラク全ク給フヘシ其位田資人モ並  
 ニ亦此ノ如クセヨ續日本紀類聚三代格  
 〔稱〕德天皇天平神護元年勅頃年以來王臣ノ封戸或ハ  
 撰田ニ縁テ應ニ調庸ヲ免スヘキ者便チ餘郷ヲ以テ

數ニ滿テ充給ス是レ則チ徒ニ官物ヲ損シ獨私門ヲ  
 闕ク自今以後諸家ノ食封損田アルノ戸ハ宜ク令條  
 ニ依テ除免シ通計シテ滿給スルヲ得サルヘシ令集  
 〔神〕護景雲三年七月十五日厨真人厨女ニ封四十戸田  
 十町ヲ賜フ續日本紀  
 〔光〕仁天皇寶龜二年三月十五日勅内臣ノ職掌官位祿  
 賜職分雜物ハ宜ク皆大納言ニ同フスヘシ但食封ハ  
 一千戸ヲ賜ヘ續日本紀  
 〔桓〕武天皇延曆八年八月廿一日是ヨリ先キ參議正三  
 位佐伯宿禰今毛人仕ヲ致ス而シテ其參議ノ封戸ヲ  
 罷メ半ヲ減シテ之ヲ賜ヒ民部ニ下知シテ以テ永例



ト爲ス 續日本紀

〔平城天皇大同三年十月十九日〕太政官奏ス、詔令ヲ案スルニ王臣ノ食封各等次アリ但五位已上此例ニ在ラス而シテ慶雲年中更テ差數ヲ昇シ延テ四位ニ及ヒ大同元年大納言已上ノ職封舊ニ復シテ加ヘ畢ル然ラハ則チ加ヘ給フコト有リト雖モ未タ減省ヲ見ス據リ行フ所ノ專理軌ヲ同フスヘシ伏シテ請フ今ヨリシテ後一品以下ノ食封並ニ四位ノ位祿等並ニ令條ニ依ラン但先ニ恩賜ヲ經タルハ更テ收還セス其階ヲ加ヘ級ヲ進ムルノ日即便チ廻シ給ハ、各其所ヲ得ン凡ソ法令ノ興ル其來ルコト尙シ有國ノ運

規不易ノ典ナリ而シテ一ハ則チ遵行シ一ハ則チ據ルコトナシ臣等商量スルニ良ニ然ルヘカラス謹テ事狀ヲ錄シ伏テ天裁ヲ聽ン謹テ以テ奏聞ス 類聚三代格

〔嵯峨天皇大同四年四月二十日勅去シ大同元年六月十日始テ諸道ノ觀察使ヲ置ク寄深クシテ俗ヲ庇ヒ任重クシテ未タ廉ナラス故ニ二年四月十六日食封各二百戸ヲ賜フ頃年諸國損弊シテ百姓困乏ス今公用ヲ支度スルニ頗ル欠少アリ宜ク暫ク返納シテ外任ヲ兼テシメ彼公廩ヲ以テ此食封ニ代フヘシ若シ理ニ依テ解任シ及ヒ致仕スル者ハ則チ別封ヲ納メヨ其返シ收ル封ハ宜ク國ヲ兼ルヲ待ツヘシ 日本紀略



〔按外任ハ國守ヲ謂フ凡ソ國司ニハ定領ノ公麻アリ之ヲ以テ其食封ニ代フルナリ〕

〔六月廿三日〕太政官奏ス勅ヲ奉スルニ無品親王内親王ノ封戸ハ大同三年十月十九日ノ論奏ニ云ク一品已下ノ食封竝ニ四位ノ位祿等ハ竝ニ令ニ據リ詔マ但先ニ恩賜ヲ經ルハ更ニ收返セス其階ヲ加ハ級ヲ進ルノ日即便チ廻シ給ハ、各其所ヲ得ント又大同三年六月廿九日ノ式ニ云ク無品親王ノ食封二百戸男女竝ニ同シ但叙品ノ後一ニ停止ニ從ハント今奏意ヲ檢スルニ無品内親王四品ニ叙スルノ日封邑一百五十戸然ラハ則チ無品ノ日封二百戸叙品ノ時還テ五十ヲ失フ事ノ在ル所良ニ穩便ナラス宜ク議定

奏聞スヘシト謹テ勅旨ニ依テ商量スルニ件ノ封戸大同三年ノ論奏令ニ依リ已ニ詔マ然ラハ則チ女ハ良ニ宜ク半減スヘシ内親王ハ令ニ准シテ之ヲ半ニス其先ニ恩賜ヲ經タルハ復タ論奏ニ據リ更ニ收返セサラン謹テ專狀ヲ錄シテ伏シテ天裁ヲ聽ン謹テ以テ奏ス勅ス奏ニ依レ類聚三代格

〔十二月二十日〕夫人正四位下橘朝臣嘉智子正四位下多治比真人高子二人ニ封ヲ賜フコト各一百戸日本紀畧  
〔弘仁十四年六月二日〕封戸ヲ充テ奉ルコト太上天皇ニ一千五百煙皇太后ニ一千煙日本紀畧

〔淳和天皇天長二年五月八日〕右大臣緒嗣上表シテ封



一千戸ヲ以テ國用ヲ支ヘ奉ル勅シテ請ニ依ラシム  
日本紀畧

〔七年六月廿四日〕從三位百濟王慶命ニ位封ノ外特ニ  
封五十煙ヲ給フ  
日本紀畧

〔仁明天皇承和二年三月十二日〕勅後太上天皇ノ御封  
二千戸皇太后ノ御封一千戸冷泉院ノ御封ニ准シテ

之ヲ行ヘ若シ損有ルノ年ニ當ラハ公ヲ以テ相補テ  
之ヲ進メシメヨ  
日本後紀

〔七年六月廿八日〕公卿等重テ奏シテ曰ク云々伏シテ  
望ラクハ五位以上ノ封祿暫ク省約ニ從ヒ涓流ニ遵

テ溟海ヲ添ヘ燭火ヲ持テ太陽ヲ助ン楹中納言從三

位藤原朝臣良房綸旨ヲ奉シテ報命シテ曰ク類ニ來

表ヲ省シテ之カ懇情ヲ具サニス宜ク食封ノ家請ニ  
依テ之ヲ減スヘシ人別ニ四分ノ一但四位五位ノ秩

祿ハ惟レ薄シ今年ノ間減省スヘカラス  
日本後紀

〔八月八日〕是ヨリ先キ參議從三位中務卿源朝臣定上  
表シテ所職ヲ退カシトフ乞フ是日參議中務卿ノ

職請ニ依テ之ヲ許ス但別勅アリテ封百戸ヲ食マシ

日本後紀  
本朝編年錄

〔十二年正月廿七日〕右大臣從二位橘朝臣氏公上表シ  
テ食封一千戸ヲ返サンコトヲ請フ天皇勅書ヲ賜ヒ

之ヲ聽ルス  
日本後紀



〔右大臣藤原基經ナリ〕

二月ニ壬午ナ  
レ壬午ハ三月  
四日ナリ日月  
誤アラシ

〔嘉祥元年十二月廿七日太政官符今年六月十三日ノ  
詔書ヲ案スルニ天下ヲシテ今年田租ノ半ヲ輸スコ  
ト無ラシム然ラハ則チ諸家ノ封租モ亦須ラク半ヲ  
除クヘシ右大臣宣ス寶龜ノ例ニ准シテ正統ヲ以テ  
數ニ滿テ之ニ充テヨ類聚三代格

〔三年二月壬午勅有テ封戸百兩ヲ特ニ源朝臣貞姫ニ  
給フ續日本後紀

〔清和天皇貞觀十四年十一月二日〕右大臣表ヲ抗シテ  
曰ク誠ニ賢ヲ見テ齊カラシムコトヲ願フ職封ノ一半  
ヲ還シ少ヲ積テ大ヲ成シ國用ノ萬分ヲ裨ハン惻誠  
ニ堪ヘス謹テ以テ表ヲ奉ルト詔シテ之ヲ許ス三代實錄

〔十六年九月廿一日〕無品惟高親王ニ百戸ヲ益封ス三代實錄

〔十八年十二月八日〕勅シテ太上天皇宮ニ御封二千戸

ヲ充テ奉ル三代實錄類聚國史

〔宇多天皇寛平三年〕封戸ヲ半減ス日本紀略

〔接〕天智帝以來藤氏ノ封戸漸次整延シ隨テ諸臣ノ封戸多キニ過ク是ヲ以テ一般之ヲ減省スルカ

〔式〕凡ソ食封ハ東宮ニ二千戸無品親王ニ二百戸内親王ハ

半ヲ中納言ニ四百戸參議ニ八十戸理ヲ以テ解官シ及ヒ致仕スル者

ハ半ヲ減ス○民政部式

凡ソ封戸ハ正丁四人中男一人ヲ以テ一戸ト爲ス率



租ハ毎戸卅束ヲ以テ限トナシ每郷課口二百人中男  
五十人租稻二千束ニ滿ツ若シ此數ニ滿タサレハ國  
内ニ通計シテ填テシム但損ニ遭フノ年ハ通計シテ  
滿テ給フコトヲ聽サス悉田分ノ封五十戸モ亦此ニ准ス其神寺ノ封  
丁ハ五六丁ノ例ニ依ル人ノ封ニ准シテ増減スヘカ  
ラス民部式  
凡ソ諸家ノ封戸ハ各三分ト爲シ一分ハ絶ヲ輸ス國  
二分ハ布ヲ輸ス國ヲ充ツ但伊賀伊勢參河近江美濃  
越中石見備前周防長門紀伊阿波等ノ國ハ封ニ充ツ  
ルコトヲ得ス民部式  
按田制租法ニ據ルニ紀伊阿波等ノ國封ニ充ル  
ヲ得サル者ハ其國神戶多ク人民ノ口分田ニ足

ヲサルヲ計リテ是制アリ  
其餘諸國或ハ是類ナラン  
凡ソ中官ノ封若シ損アルノ年ニ當ラハ當國ヲシテ  
正稅ヲ以テ交易辨進セシム春官坊モ此ニ准ス民部式  
凡ソ職封ハ官ヲ解キ竝ニ身薨スレハ即チ還收ス若  
シ解薨スルコト調物ヲ納ムル限月以後ニ在ラハ給  
フコトヲ聽ルス別勅ノ封物モ此ニ准ス品位ノ封ハ薨年ノ料全  
ク喪家ニ納ム無品ノ封モ亦此ニ準ス民部式  
按職封ハ其職ニ給シ品位ノ封ハ其人ニ  
給ス是レ其還收ニ遲速有ル所以ナリ  
凡ソ別勅封ヲ賜フテ若シ其人位ヲ授ケ官ニ任スレ  
ハ便即チ廻シ充ツ民部式  
凡ソ官ニ任シ位ニ叙シ及ヒ薨卒シテ應ニ封田ヲ收



〔伏座〕儀仗ノ座ナリ

給スヘキ者ハ官ヨリ符ヲ省ニ下シ奏文ヲ造リ内侍ニ付シテ直奏セシメ詔ヲ即チ施行シ皆便ヲ量テ之ヲ給ヒ阿容スルコトヲ得ス民部式  
凡ソ功臣ノ封子ニ傳フル者子無ケレハ傳ヘス但兄弟ノ子ヲ以テ養子ト爲ス者ハ其養子ニ傳ルコトヲ聽ルス傳封ヲ得ル者子無レハ亦養子ニ傳フルコトヲ聽ルス其世ヲ計フルコト正子ノ如シ但嫡孫ヲ以テ繼ト爲ス者ハ封ヲ傳フルコトヲ得ス民部式  
〔村上天皇康保四年九月廿三日〕諸卿仗座ニ於テ御即位儀式ヲ定メラル今日中宮ノ御封千五百戸東宮ノ封千戸ヲ宛ツ日本紀畧

〔皇太弟〕諱ハ守平村上帝ノ弟五皇子冷泉帝ノ同胞弟ナリ

〔年爵年官〕藤原鈔ニ云爵ハ即チ從五位下官ハ乃チ様若クハ内官ナリ蓋シ年々其官爵ノ轉ヲ圖フナリ  
〔准三宮〕官職給養ニ云大皇太后宮皇太后宮皇孫宮ノ三宮ニ進スルヲ謂フ

〔冷泉天皇安和二年九月廿三日〕皇太弟ニ封千戸ヲ賜日本紀畧  
〔圓融天皇天祿三年十二月十六日〕勅シテ資子内親王ニ年爵年官ヲ賜ヒ又本封ノ外千戸ヲ加フ日本紀畧  
〔永觀二年十二月朔日〕勅書シテ今上ノ外祖母惠子女王ニ封三百戸年官年爵ヲ給フ日本紀畧  
〔一條天皇正暦元年五月十三日〕勅シテ入道太政大臣任人ニ爵ヲ賜ヒ准三宮舊ニ依テ改メス又封二千戸ヲ加ヘ給フ日本紀畧  
〔五年九月廿六日〕前中納言藤原文範ニ封戸五十烟ヲ加ヘ給フ日本紀畧



大相國藤原  
道長ナリ

〔前大相國〕藤原  
道長ナリ

〔寛弘五年正月十六日〕前太宰權帥伊周ヲ大臣ニ准シ  
封千戸ヲ給フ日本紀畧  
大鏡裏書  
〔三條天皇長和四年十二月廿七日〕勅シテ禎子内親王  
ニ年官年爵三宮ニ准シ本封ノ外千戸ヲ加フ日本  
紀畧  
〔五年六月十日〕勅シテ左大臣ニ年爵年官三宮ニ准シ  
本封ノ外食邑三千戸ヲ加ヘ又室家源倫子ニ本封ノ  
外邑土三百戸年爵内外官ノ三分ヲ給フ日本  
紀畧  
〔後一條天皇寛仁三年五月八日〕勅シテ入道前太政大  
臣任人ニ爵ヲ賜ヒ准后故ノ如クシテ改メヌ又封戸  
二千戸ヲ給フ日本  
紀畧  
〔後冷泉天皇治暦三年十月七日〕前大相國ニ准三宮ノ

〔後明門院〕三條  
天皇ノ皇子  
子内親王ナリ

勅書年官年爵食邑三千戸ヲ賜フ扶桑  
畧記  
〔後三條天皇延久元年六月十九日〕第一内親王聰子ヲ  
一品ニ叙シ千戸ノ封邑ヲ給フ扶桑  
畧記  
〔十一月廿六日〕二品俊子内親王三品佳子内親王ニ別  
封各二百戸ヲ加フ扶桑  
畧記  
〔四年十二月朔日〕女御源朝臣基子ヲ三宮ニ准シ年官  
年爵竝ニ封戸五百煙ヲ給フ扶桑  
畧記  
〔白河天皇承暦三年八月十七日〕勅シテ篤子内親王ヲ  
以テ三宮ニ准シ封邑千戸ヲ賜フ祖母陽明門院ノ讓  
リニ依テナリ扶桑  
畧記  
〔堀河天皇寛治七年正月十九日〕中宮媼子ニ院號宣旨

大相國藤原  
道長ナリ



〔主計〕稱員令ニ  
 云謂及ヒ雜物  
 フ計ヘ納レ因  
 用ヲ支度シ用  
 度ヲ勘勾スル  
 コトヲ掌ル  
 〔主稅〕同書ニ云  
 倉廩出納諸國  
 ノ田租米賦  
 證ノ事ヲ掌ル

ナレバ...

ヲ蒙ラシメ封戸舊ノ如シ年分ノ受領ヲ賜フ  
 〔鳥羽〕天皇元永二年十二月廿五日民部省ヨリ主計主  
 稅兩寮ニ符ス應ニ尾張國長治元二嘉承元二天仁元  
 二天永二三永久元二三四五元永元竝ニ十五年ノ封  
 戸ヲ收給スヘシ

長治元年 收給セズ

同 二年

收

廿五戸 祐子内親王封

十五戸 權中納言藤原朝臣季仲職封

嘉承元年

收  
 卅五戸 大納言源朝臣師忠職封  
 給  
 廿五戸 權中納言源朝臣顯通職封

同 二年

返納

春官坊御封廿五戸

收

五十戸 前二條院御封

五十戸 權大納言藤原朝臣公實職封

奉宛

大日本...

...

...

...



皇后宮職御封廿五戸

給

權中納言藤原朝臣宗忠職封

奉宛

中宮職御封五十戸

以前大畧收給注進件ノ如シ朝野群載

莊園

〔按〕莊ハ田舎ナリ莊園トハ猶別業ノ田園ト言フ  
カコトシ古ハ山野開地ヲ大臣巨室ニ賜テ別業  
ヲ營マシム爾來勢家多ク開地ヲ占メ墾闢縱橫  
素封充滿騎着豪俠自ラ結束セサルニ至ル神皇  
正統記ニ云中古以來多ク莊園ヲ立テ不檢ノ地  
多シ遂ニ亂國ト成レリト又退私録ニ云門司不

入ノ地ナリト夫レ不入トハ政規範圍ノ外ニ置  
キ百事其自由ニ任スノ謂ナリ故ニ和訓栞ニ以  
テ私領トス聖學自在ニ莊園停廢ノ宣旨ヲ載セ  
テ又後三條帝嚴禁ノ勅アリ凡ソ莊園ノ地マ  
ル郡ニ非ス郷ニ非ス國法ノ度外ニ在リ地主賢  
臣ト雖モ之ヲ如何トモスル無キニ至レリ又天  
平廿年弘福寺所務所注言ニ云水田三十五町二  
段九十三歩墾田三段一百九十六歩墾陸田一町  
莊家一所ト此時未タ莊園ノ名稱ヲ見ス然トモ  
莊家ハ權門勢家ノ置ク所之ヲ管スル者即チ莊  
長ナリ後世變シテ莊司トナリ其勢國司ト相抗  
ス遂ニ資テ以テ割據封建ノ勢ヲ成ス所ナリ

〔桓武〕天皇延曆十六年八月三日勅諸家ノ莊長多ク私

佃ヲ營ミ威ヲ假リ勢ニ乘シテ民ヲ蠶スルコト良ニ

深シ奸猾ノ源絶タサル可ラス宜ク禁制ヲ加ヘテ更

ニ然ルコトヲ得サラシムヘシ類聚國史類聚三代格

〔嵯峨〕天皇弘仁十三年十二月廿八日中納言從三位行



春宮大夫左衛門督陸奥出羽按察使長岑朝臣安世上  
 疏シテ曰ク河内國ハ諸家ノ莊園往々ニシテ在リ土  
 人數少ク京戸過多ナリ伏シテ望ム京戸土人ヲ論セ  
 ス田一町ヲ營スル者ニハ正稅卅束ヲ出舉セント之  
 ヲ許ス類聚 國史

按食貨志ニ云班田ノ制壞レ莊園漸ク盛ナリ桓  
 武嗟峨ノ朝ニ始リ親王及ヒ王臣ノ莊園郡國ニ  
 遍滿セリト桓武嗟峨ノ朝已  
 ニ其弊兆ヲ現ス此ノ如シ

〔宇多天皇寛平八年四月二日太政官符權貴ノ家勢ニ  
 乘シ威ヲ挾ミ莊家ノ側近ト稱シテ則チ平民ノ田地  
 ヲ妨ケ或ハ賣買和セス三四十町ヲ點領シ或ハ事ヲ  
 負累ニ寄セテ五六載ノ券ヲ賣メ取り租ヲ收ムルニ

至テハ拒捍シテ輸サス賦稅之ニ由テ入ラス國司之  
 カ爲ニ煩ヒ多シ夫レ五位ヨリ已上ハ冠蓋既ニ貴ク  
 委寄輕カラス自ラ代耕ノ祿有リ何ソ載畝ノ利ヲ食  
 ラン仍テ須ラク諸官王臣ノ家及ヒ五位ヨリ已上ハ  
 莊田品位職田ヲ除クノ外一切ニ耕種スルコトヲ聽  
 サ、ルヘシ類聚三 代格

〔醍醐天皇延喜二年三月十三日太政官符新ニ莊家ヲ  
 立テ多ク苛法ヲ施シ課責尤モ繁ク威脅耐ヘ難シ且  
 諸國奸濫ノ百姓課役ヲ遁レンカ爲メ動スレハ京師  
 ニ赴キ好テ豪家ニ屬シ或ハ田地ヲ以テ詐テ寄進ト  
 稱シ或ハ舍宅ヲ以テ巧ニ賣與ト號ツケ遂ニ使ヲ請



ヒ牒ヲ取り封ヲ加ヘ勝ヲ立ッ國吏矯筋ノ計ヲ知ル  
 ト雖モ而モ權貴ノ勢ヲ憚テ口ヲ鉗ミ舌ヲ卷テ敢テ  
 禁制セス茲ニ因テ出舉ノ日事ヲ權門ニ託シテ正稅  
 ヲ請ケス取納ノ時穀ヲ私宅ニ蓄ヘテ官倉ニ運ハス  
 賦稅ノ濟シ難キコト斯ニ由ラサルハ莫シ加以ス賂  
 遺ノ費ユル所田地遂ニ豪家ノ莊ト爲リ奸構ノ損フ  
 所民烟長ク農桑ノ地ヲ失ヒ遂ニ身ヲ容ル、ニ處無  
 ク還テ他郷ニ流冗ス類聚三代格○事勅  
旨田條中ニ具レリ  
 同日太政官符諸院諸官王臣ノ家諸國ノ部内ニ於テ  
 或ハ本ヨリ田地有テ自ラ莊家ヲ立テ或ハ新ニ山野  
 ヲ占メテ其地利ヲ收ム此等ノ一事ニ因テ各便宜ヲ

求メ民ノ私宅ヲ借リテ稻穀等ノ物ヲ積聚シ號ケテ  
 莊家ト稱シ好テ官物ヲ妨ク國吏ノ力敢テ制止セス  
 出舉收納自由ナルコト能ハス公事ノ濟リ難キ職ト  
 シテ此レ之ニ由レリ去シ天平九年九月廿一日及ヒ  
 天平勝寶三年九月四日兩度ノ格ニ云ク臣家ノ物ヲ  
 諸國ニ貯蓄スルコト自今以後宜ク皆禁斷スヘシ若  
 シ犯スコト有ラハ違勅ノ罪ヲ科セン其物ハ沒官シ  
 國司郡司ハ即チ見任ヲ解却セン勅ス先後ノ格旨禁  
 制嚴峻ナレトモ諸國ノ牧宰履行アルコト無シ宜ク  
 重テ下知シテ更ニ然ラシムルコト勿ルヘシ仍テ須  
 ラク莊家ト假號シ國ノ爲ニ妨ヲ致ス者ハ違勅ノ罪



〔註〕和開茶ニ云  
諸院ニ預アリ  
職掌ノ名ナリ  
〔附〕藤ハ父祖  
ノ蔭ヲ以テ出  
仕スルヲ謂フ  
爾ハ附ヲ以テ  
部ヲ購フヲ謂  
フ

ヲ科シテ物皆没官スヘシ其使及ヒ莊ノ檢校專當預  
等ト稱シ放縱不遜ニシテ以テ國務ヲ妨ケン者ハ蔭  
贖ヲ論セス杖六十ニ決セヨ但元來實ニ莊家ト爲シ  
國務ヲ妨ケサル者ハ制限ニ在ラス類聚三代格  
〔花山天皇寛和元年〕帝位ニ即キ初テ詔レテ格後ノ莊  
園ヲ停止ス扶桑略記  
〔後一條天皇萬壽中〕石清水寶塔院ニ莊園ヲ寄附ス石  
水末社記  
〔後三條天皇延久元年二月廿三日〕勅シテ寛徳以後新  
立ノ莊園ヲ停止ス縱ヒ彼年以前ト雖モ立券分明ナ  
ラス國務ニ於テ妨ケ有ル者ハ同ク之ヲ停止ス扶桑  
略記

〔寄人〕東嶽ニ據  
門ノ寄人政所  
ノ寄人公文所  
ノ寄人等アリ  
蓋シ徴士ノ類  
寄人ノ義ナル  
ヘシ

百練 鈔  
〔同日〕始テ記録所莊園券契所ヲ置キ寄人等ヲ定ム百練  
鈔

〔白河天皇承保中〕六條修理大夫顯季東方ニ知行莊園  
アリ館三郎義光之ヲ横領セント争フ顯季院ニ參ル  
院召テ曰ク汝カ訴ル所理アリ然トモ枉テ彼ニ與ヘ  
ヨ顯季怪ム色アリ院曰ク汝カ身彼地無シト雖モ更  
ニ國アリ司アリ彼義光命ヲ懸ルノ地ト云フ朕彼ヲ  
枉庇スルニ非サルナリ十訓

〔按〕當時武家莊園ノ利ヲ争フ王家ト雖モ制スル  
能ハサルモノアリ終ニ以テ源平ノ世ニ馴致セ  
リ



〔賴輔〕前山城守 藤原賴輔ナリ

〔崇德〕天皇永治元年八月四日女御得子无品内親王  
子ノ家上皇ノ御處分ヲ申請フ宣ス莊々國郡ノ課  
役ヲ免スヘシノ女御ノ家九ヶ所内親王  
〔高倉〕天皇安元二年十一月晦日賴輔朝臣ニ女院ノ御  
領石見國大宅ノ莊ヲ給ヒ之ヲ知行セシム玉海

宅地

〔接〕上古ノ民皆巢ニ住ミ穴ニ居テ未タ居室アラ  
ス神武天皇東征ノ後乃チ令ヲ下シテ日ノ集  
穴ニ住習俗惟レ常ナリ夫レ大人制ヲ立ル義必ス  
時ニ隨フ苟モ民ニ利アラハ何ソ聖造ニ妨ケナ  
ト此ニ據ルトキハ人皇ノ初民猶穴居セルナリ  
其功ヲ定メ賞ヲ行フニ及テ道臣命等首トシテ  
宅地ヲ賜フ持統天皇ニ至テ諸臣ノ宅地ニ各差  
等ヲ別ツ令條ニ於テハ則チ之ヲ賣買スルノ各差

アリ已ニ之ヲ賣買スル其  
私有タルコト知ルヘシ

〔神武〕天皇二年二月二日天皇功ヲ定メ賞ヲ行フ道臣  
命ニ宅地ヲ賜ヒ築坂ノ邑ニ居ラシメ以テ之ヲ寵異  
ス亦大來目ヲシテ畝傍山ノ以西川邊ノ地ニ居ラシ

日本書紀

〔持統〕天皇五年十二月八日詔右大臣ニ宅地四町直廣  
貳以上ニ二町大參以下ニ一町ヲ賜ヘ勤以下無位ニ  
至テハ其戸口ニ隨ヒ其上戸ハ一町中戸ハ半町下戸  
ハ四分ノ一王等モ亦此ニ准セヨ日本書紀

〔令〕凡ソ宅地ヲ賣買スルハ皆所部ノ官司ヲ經テ申牒  
シ然シテ後ニ之ヲ聽ルセ田令



〔聖武天皇天平六年九月四日〕難波ノ京ニ宅地ヲ班チ  
給フ三位以上ニハ一町以下五位以上ニハ半町以下  
六位以下ニハ一町ヲ四分スルノ一以下トス本紀日  
〔淳仁天皇天平寶字五年正月廿一日〕諸司ノ史生以上  
ニ宅地ヲ班チ給フ本紀日

〔桓武天皇延暦十二年九月二日〕菅野直道藤原其野麻  
呂等ヲ遣シ新京ノ宅地ヲ班チ給ハシム日本紀  
〔後一條天皇長元三年四月廿三日〕仗議アリ諸國ノ吏  
ノ居處ハ四分一ノ宅ニ過ク可ラス近來多ク一町ノ  
家ヲ造營シテ公事ヲ濟サヌ又六位以下ノ築垣並ニ  
檜皮葺ノ宅ハ停止スヘシ日本紀略

〔百河天皇應德三年十月二十日〕新ニ後院ヲ建テ凡ソ  
百餘町ヲトシテ近習卿相侍臣地下雜人等ニ各家地  
ヲ賜フ扶桑略記

山林

〔按上古未タ山林ノ制有ルヲ聞カス中葉ニ至ル  
亦唯伐木ヲ禁止スルニ過キス今其一ニ此ニ  
採録ス〕

〔元明天皇和銅三年二月廿九日〕初テ守ヲ山戸ニ充テ  
諸山ノ木ヲ伐ルコトヲ禁セシム本紀日  
〔桓武天皇延暦廿四年十二月廿二日〕勅六和國畝火香  
山耳梨等ノ山百姓意ニ任セテ伐損シ國吏寬容シテ



禁制ヲ加ヘス自今以後更ニ然ラシムルコト莫レ史國

嵯峨天皇弘仁九年十二月二日近江國滋賀郡比良山ノ林木ヲ伐ルコトヲ禁ス官用ニ備ルヲ以テナリ史國

陽成天皇元慶七年十月廿九日勅シテ能登國ヲシテ羽咋郡ノ福良泊山ノ木ヲ伐損スルコトヲ禁セシム渤海ノ客北陸道ノ岸ニ着スルノ時必ス還船ヲ此山ニ造ル住民伐採シテ或ハ材無キコトヲ煩フ故ニ豫メ大木ヲ伐ルコトヲ禁シテ民ノ業ヲ妨クルコト勿ラシム三代實錄

大日本租稅志卷之八終

大日本租稅志 卷之八 終



大日本租稅志卷之九

大藏權少書記官正七位野中準等修

質地

〔按古ハ田率子口分田ナリ私ニ典賣スヘカラス其典賣スル者ハ墾闢ノ私地ノミ後來班田ノ法漸ク廢レ民皆其田ヲ私有ス是コト於テ典賣日ニ盛ナルニ至レリ〕

〔孝謙〕天皇天平勝寶三年九月四日太政官符豐富ノ百姓ハ錢財ヲ出舉シ貧乏ノ民ハ宅地ヲ質ト爲ス此ニ賣ノ急ナルニ至テ自ラ質ノ家ヲ償テ住居スルニ處無ク遂ニ他國ニ散シテ既ニ本業ヲ失フ或ハ民弊多ク蠹ト爲ルコト實ニ深シ自今以後皆悉ク禁斷セヨ



若シ先ノ日ニ約契スルコト有ラハ償期ニ至ルト雖  
 モ猶任マニ住居シテ稍酬償セシメヨ類聚三 代格  
 〔桓武天皇延暦二年十二月五日〕是ヨリ先キ去シ天平  
 勝寶三年九月ノ太政官符ニ曰ク豐富ノ百姓云々ト  
 是ニ至テ勅ス先ニ禁斷有レトモ未タ曾テ懲革セス  
 而シテ今京内ノ諸寺利潤ヲ貪リ求メ宅ヲ以テ質ニ  
 取リ利ヲ廻ラシテ本ト爲ス只網羅ノ法ヲ越ルノミ  
 ニ非ス抑モ亦官司ノ阿容ナリ何ソ其レ吏タルノ道  
 輒チ王憲ニ違ヒ出塵ノ輩更ニ俗網ヲ結フ宜ク其レ  
 多歲ヲ經ルト雖モ一倍ニ過ルコト勿ルヘシ如シ犯  
 者有ラハ違勅ノ罪ヲ科セン官人ハ其見任ヲ解キ財

〔舊〕悉クハ和ノ  
 事ナラン

貸ハ官ニ没セヨ續日本紀 類聚國史

賣買田

〔按〕田園ヲ賣買スル其來ルコト久シ故ニ大化ノ  
 和メ已ニ其兼併ヲ防キ其賣ルコトヲ停ム然ト  
 モ私墾ノ田園ニ至テハ究竟賣買ヲ禁スヘカ  
 ス之ヲ禁スルコト甚キトハ人民ノ便宜ヲ妨  
 ケテ所以ナリ天平以來賣買ノ令ニ存スルモ  
 ナル所ナリ其法ノ確實重ナルコト見ルヘ  
 シ往々之アリ租ノ數額及ヒ代價ノ多寡ヲ記  
 スルモノアリ是レ亦以テ其地ノ租法ヲ見ルニ  
 足ル故ニ一二明証ナルモノヲ採テ併セ録ス

〔孝德天皇大化元年九月十九日詔〕國縣ノ山海林野池  
 田ヲ割テ以テ己カ財ト爲シ爭戰己マス或ハ數萬頃  
 ノ田ヲ兼併シ或ハ全ク針ヲ容ル、ノ少地無シ云々



方今百姓猶乏シ而シテ勢アル者水陸ヲ分割シテ以  
テ私地ト爲シ百姓ニ賣與シテ年ニ其價ヲ索ム今ヨ  
リ以後地ヲ賣ルコトヲ得ヌ妄ニ主ト作り劣弱ヲ兼  
併スルコト勿レ日本書紀

〔令〕凡ソ官人百姓竝ニ田宅園地ヲ將テ捨施シ及ヒ賣  
易シテ寺ニ與フルコトヲ得サレ田令

〔元〕明天皇和銅六年三月十九日詔田ヲ賣買スルハ錢  
ヲ以テ價ト爲セ若シ他物ヲ以テ價ト爲サハ田井ニ  
其物ハ共ニ沒官ト爲セ或ハ糺告スル者有レハ則チ  
告ル人ニ給シ賣及ヒ買人ハ竝ニ違勅ノ罪ヲ科セン  
郡司檢校ヲ加ヘス十事以上ヲ違ヘハ即チ其任ヲ解

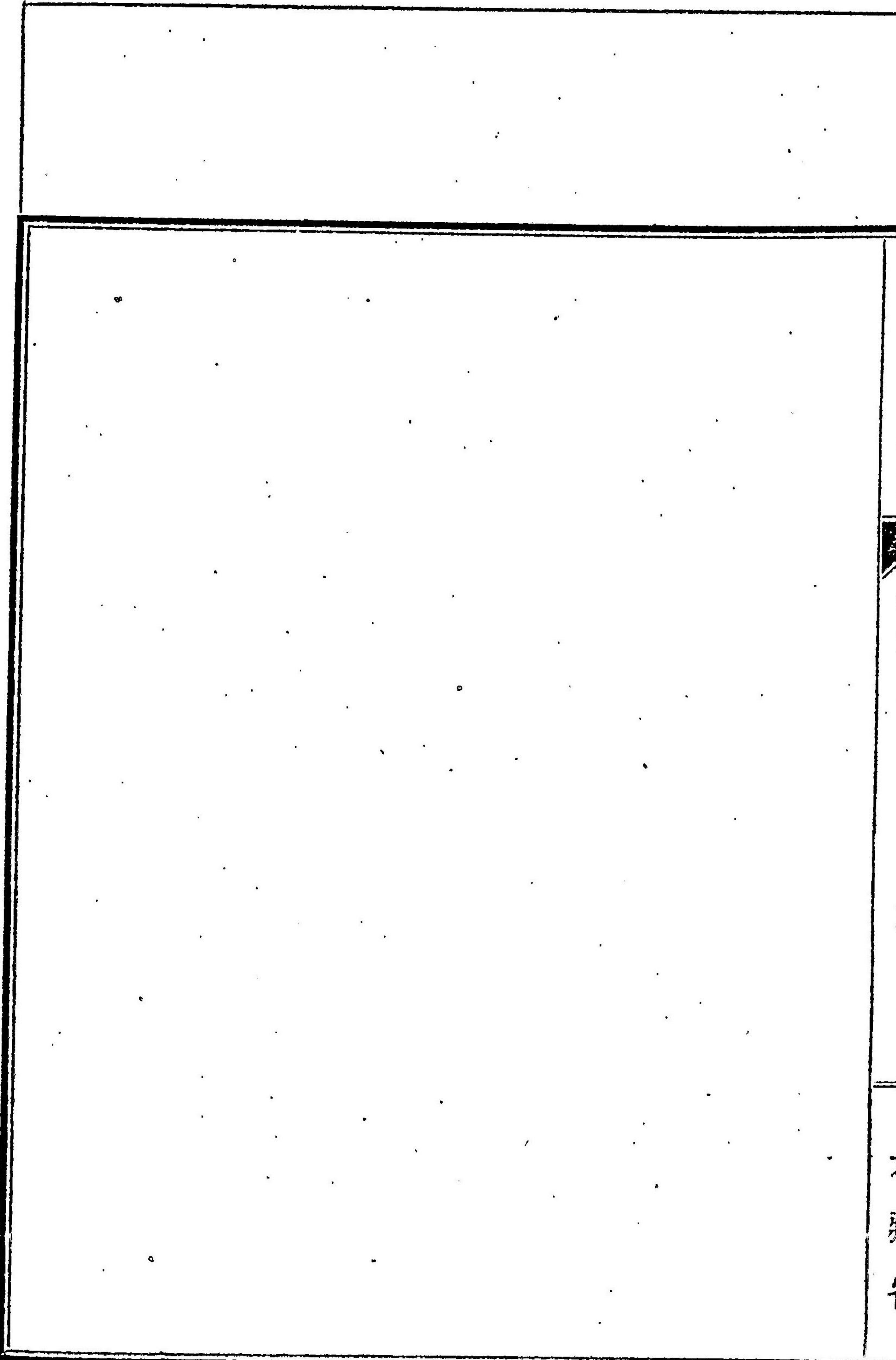
キ九事以下ハ考第ヲ量リ降セ國司ハ式部監察シテ  
違ヲ計リ考ヲ附ケヨ或ハ錢ヲ用フルニ非スト雖モ  
而モ通商ヲ情願スル者ハ之ヲ聽ルセ續日本紀

〔按〕古ハ田ヲ賣買スルニ五穀布帛及ヒ物品ヲ用  
テ價直ト爲ヌ是時ニ及テ大ニ錢貨ヲ鑄造ス故  
ニ一ニ之ヲ用ヒシムルナリ

〔聖〕武天皇天平十八年五月九日諸寺百姓ノ墾田及ヒ  
園地ヲ競買シテ永ク寺地ト爲スコトヲ禁ス續日本紀

〔桓〕武天皇延暦二年六月十日勅田宅園地ヲ將テ捨施  
シ竝ニ賣易シテ寺ニ與フレハ主典已上ハ見任ヲ解  
却シ自餘ハ蔭贖ヲ論セス杖八十ニ決セヨ官司知テ  
禁セサレハ亦與ニ罪ヲ同フセヨ續日本紀





餘交原書紙信  
 大小一ナラス  
 字ハ行若クハ  
 行ヲ用フ而シ  
 テ人名ハ本人  
 自筆ニ係レソ  
 今一切活版ヲ  
 以テ繕寫シ人  
 名ハ後ニ其字  
 ヲ大ニス朱印  
 ハ大サ字作等  
 略其舊樣ニ從  
 フ下皆之ニ倣  
 〽  
 〔券〕券ハ和訓兼  
 ニ云テカタ券  
 契ヲ謂フ

謹解  
 賣買券文進事  
 會地棚段庫間

有宇治郡加美鄉堤田村  
 直純拾匹稅布拾端

此地主加美鄉戶主宇治宿禰大國  
 以前地買進舊正三位藤原南夫人家已訖仍具

錄狀謹解

天平廿年八月廿六日  
 賣地人宇治宿禰大國

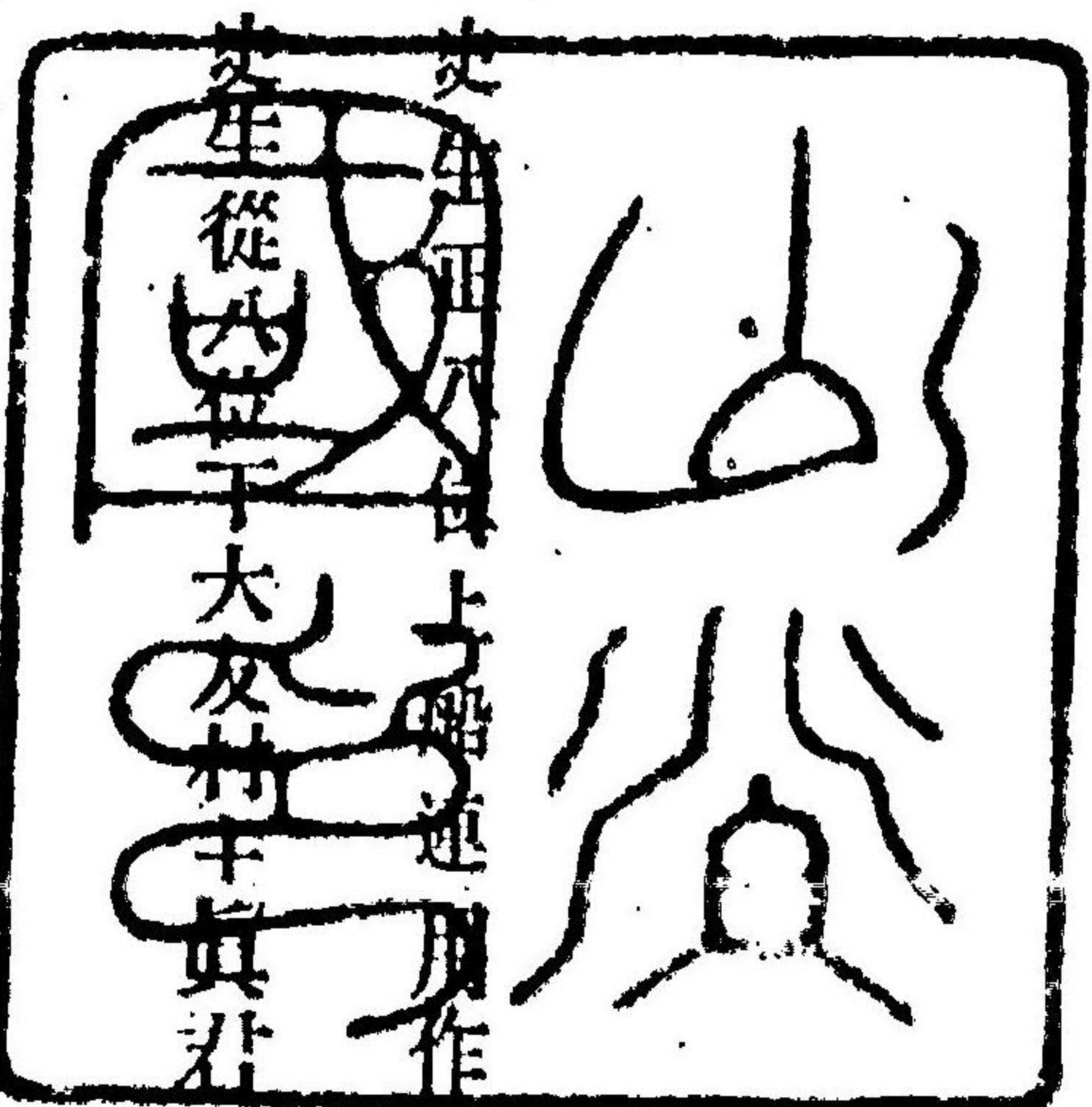
判郡司



大領外正七位下宇治宿禰君足主帳无位今木連安万呂  
小領外從八位下宇治宿禰都惠

判國司

介從五位下勳十二等若犬養宿禰東人



史生從八位上  
大友村千真君

天平廿年十月十八日

東大寺古文書

東大寺三綱牒 攝津職

請庄地券文事

析東南地參町壹段壹佰貳拾玖步

四至 東小郡前西谷 南小道  
西谷井漆部伊波地 北堀江川

價錢捌拾肆貫伍佰捌拾捌文

以前地在西生郡美怒鄉本數三町六段二百卅九  
步主安宿王以去天平勝寶四年正月十四日充價  
錢一百貫文賣納東大寺已訖未立券文三綱商量  
便宜轉賣新藥師寺已訖請職察趣依式欲立券文



仍具事狀以牒

天平寶字四年十一月七日

賣却三綱都維那僧等貴

佐官兼上座法師平榮

寺主法師法正

買新藥師寺三綱都維那僧春幸

上座僧聞崇

寺主僧信忠

大鎮法師平攝

少鎮僧奉珍

攝津職判依牒

從四位下行大夫佐伯宿禰今毛人

正六位上行大進勳十二等國連

正六位上行少進勳十二等海犬宿禰

正七位上行少屬土師宿禰道長

天平寶字五年正月十日

東大寺古文書



大日本... 卷之九... 十市郡... 申立賣買地券事... 並在十市郡池上郷... 東限朱雀路... 南即廣長口分田... 西溝井小道... 北車持朝臣仲智地... 右左京七條二坊戶主息長丹生真人廣長貢地... 者



申立賣買地券事  
並在十市郡池上郷

一區地參段 在板倉壹宇板屋參宇

東限朱雀路 南即廣長口分田

西溝井小道 北車持朝臣仲智地

右左京七條二坊戶主息長丹生真人廣長貢地

者



一區地肆段

在草葺屋壹宇

東限朱笠路  
南息長真人廣長地

西溝小道并十市郡池上鄉忍海連力士家  
北十市郡池上鄉小赤臣真人分田

充價錢陸仟文

右右京五條二坊戶主正八位上車持朝臣若  
足戶口從五位下車持朝臣仲智沽地者

以前得廣長等辭狀曰絕上件地常根沽與東大  
寺布施屋地已訖望請依式欲立券文者郡員勘  
問得實仍勒估買兩人署名立券如件以解

天平寶字五年十一月廿七日

息長丹生真人廣長

相智僧勝緯

重持朝臣仲智

知事紀朝臣形磨

買寺三綱都維那僧承天

上座法師安寬

佐官兼寺主法師平榮

可信法師法正

寺使坤官官舍人少初位下衣縫牛村

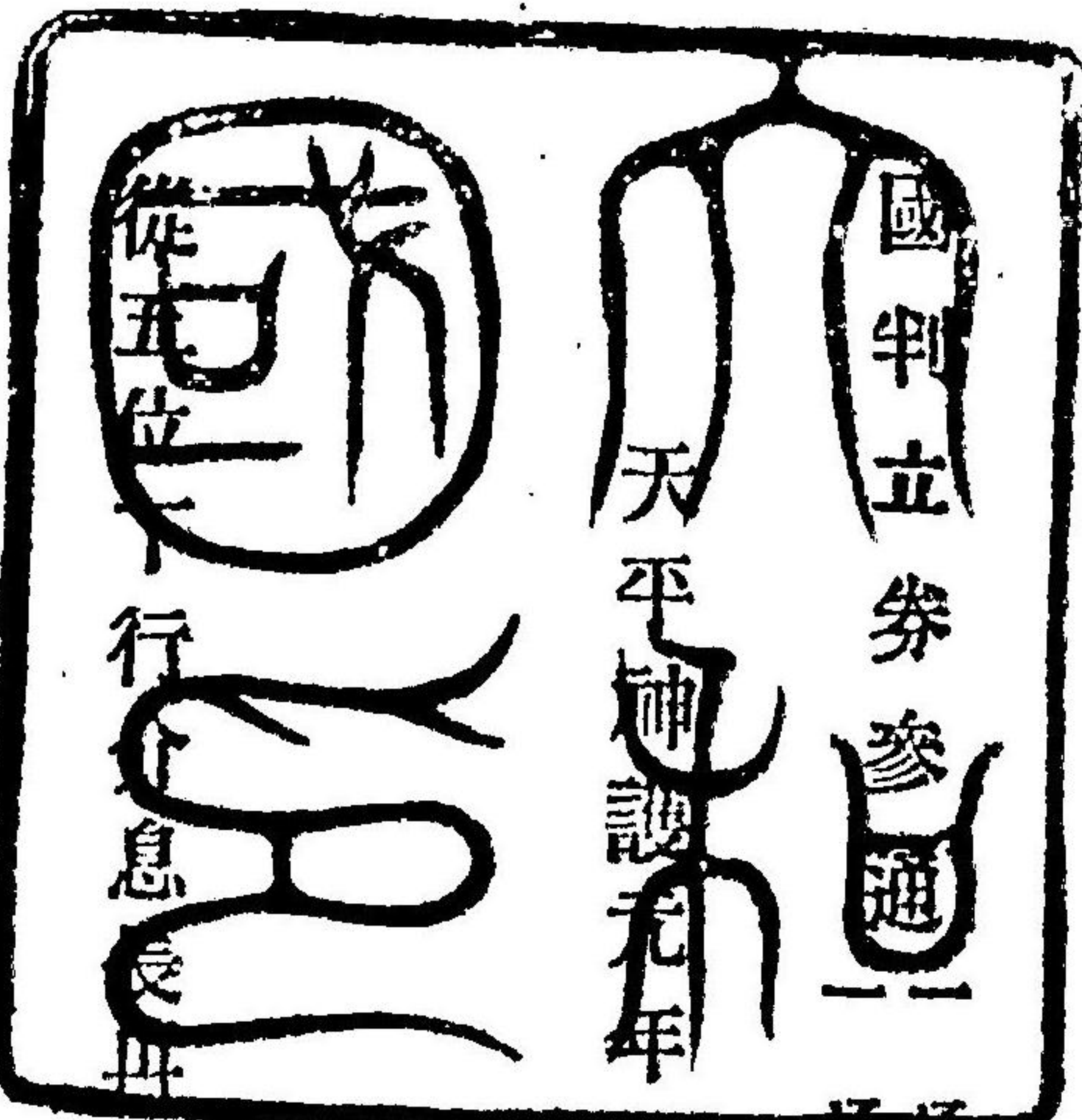
郡司擬大領外正七位忍海連法磨



擬主帳无位大伴大田

國判立券參通  
一通留國  
一通置寺家  
一通置郡

天平神護元年八月十六日正七位下行大目馬毗登夷人



生真人大國正七位上行少掾掃守田毗登馬養

東大寺古文書

院東御倉後所券文

謹解 申賣吳家地事

合地壹段 草屋二間 直錢壹貫伍佰文

北長尾山東宇治宿禰  
乙白家 西法花寺尼公  
院 南田

右家地大國鄉戶主從八位上宇治連麻呂戶口矢田部造麻呂家

地此今賣與東大寺僧勝康常地已訖仍具注狀以謹解

天平寶字五年十一月二日

賣地主矢田部造廣

相知戶主從八位上宇治連廣



鄉長多米連小林

證人正八位上三國真人蜂目

山村日佐豐國

判郡司

擬大領正八位上宇治宿禰水通

主政正八位下神宮部造安比等

擬少領從八位上宇治宿禰

主帳外少初位上今木連

東大寺古文書

在田郡司解 申依式賣買新田並家地畠地等  
立券文事

合地伍町參段佰肆拾肆步 總價直稻參仟漆拾肆束

新田參町佰肆拾肆步 直稻貳仟貳百貳拾肆束

一所和佐村七段二百十六步 直 稻 六 百 八 束

門田五段 四至 東至百姓口分田 南至細道 西至百姓口分田 北至敷原 直稻四百束 段別八十束

阿彌院道田百卅四步 四至 東至百姓口分田 南至竹原 西至竹原 北至百姓口分田 直稻卅五束

段別八十七束



垣内幡田七十二步 四至 東至畔 南至公田 直稻十八束 段別大凡九十束  
 西至公田 北至公田  
 垣内幡田西主一段 四至 東至 阪南至 島西至口分田 北至口分田 直稻七十五束  
 大町南主一段 四至 東至 岡南至 岡西至 敷北至 公田 直稻八十束  
 一所舟生村九段七十二步 直稻漆伯參拾陸束 段別八十束  
 荒木田二段二百十六步 四至 東至 子午畔 南至 卯酉畔 直稻二百八束  
 西至 百姓口分田 北至 道  
 中荒木田二百十六步 四至 東至 大溝 南至 紀臣豐繼治田 直稻卅八束  
 西至 百姓口分田 北至 道  
 高苗代田二段 四至 東至 百姓口分田 南至 百姓口分田 直稻百六十束  
 西至 百姓口分田 北至 大溝  
 畠田二段 四至 東至 坂上清水地 南至 百姓口分田 直稻百六十束  
 西至 大溝 北至 百姓口分田  
 北町班原田二段 四至 東至 紀臣常島島 南至 畔紀臣常島治田 直稻百六十束  
 西至 班原口分田 北至 紀臣常島島

一所大豆田村野田九段二百十六步 四至 東至 社井野 南至 紀直線九家井野 直稻四百八十束 段別五十束  
 西至 百姓口分田 北至 百姓口分田  
 一坪一段 同村野田  
 一坪三段百廿步 同村野田南圭  
 一坪一段二百卅一步 同村古家南圭  
 一坪三段二百廿五步 同村古家南圭  
 一所同村梶原田四段 四至 東至 紀宿禰千本治田 南至 道 直稻四百束  
 西至 紀宿禰千本島 北至 大河  
 段別百束  
 家地一町三段 在吉備郷 直稻伍佰伍拾束



一所三段 在舟生村 四至 東至百姓口分田 南至道 直稻百五十束

段別五十束

一所一町 野村 四至 東至粟栖島 南至紀臣波自女地 直稻四

百束 段別卅束

島一町 在吉備郡小島村 四至 東至寺地 南至神奴知島地 直稻

參百束 段別卅束

右得擬大領紀宿禰直貞解狀條已新田並家地島等  
依式常地與沽權大僧都傳燈大法師位真濟大德既  
訖者依解狀郡加勘察所申有實仍為後勒賣買兩人

署名立券文如件以解 東寺百合 古文書

〔按〕本券年月名署關クト雖モ真濟ニ與ヘ沽  
ルノ文ニ因テ考ルニ東寺長者補任ニ云真  
濟仁志三年十月廿九日權大僧都ニ任シ濟  
術三年十月廿七日僧正ニ任スト則チ仁志  
齊術ノ間ニ在ルコト知ルヘキナリ



田地賣買券

攝津國島上郡兒屋郷長解申立賣買常地券文事

合地參町伍段

在五條一里十七十八兩坪內七段十九坪

八段廿坪一町 廿一坪一町

四至 限東沒官地 限西藤原種雄地

限南路 限北公田平紀隆高領山

右得內豎從七位下紀朝臣氏秀辭狀係件地故親  
父岑高以去延長八年六月十三日從大藏利常之



手所買得也其後親父存生之日所處分給也而今  
宛價直稻肆佰貳拾束限永年沽與主計史生從七  
位上御船宿禰真元既畢望也欲被立券文者長依  
辭狀加覆審所陳有實仍勒賣買兩人並保證署名  
立券文如件以解

天曆四年六月十七日 長

賣人內豎從七位下紀朝臣

買人主計史生從七位上御船宿禰

保證刀禰

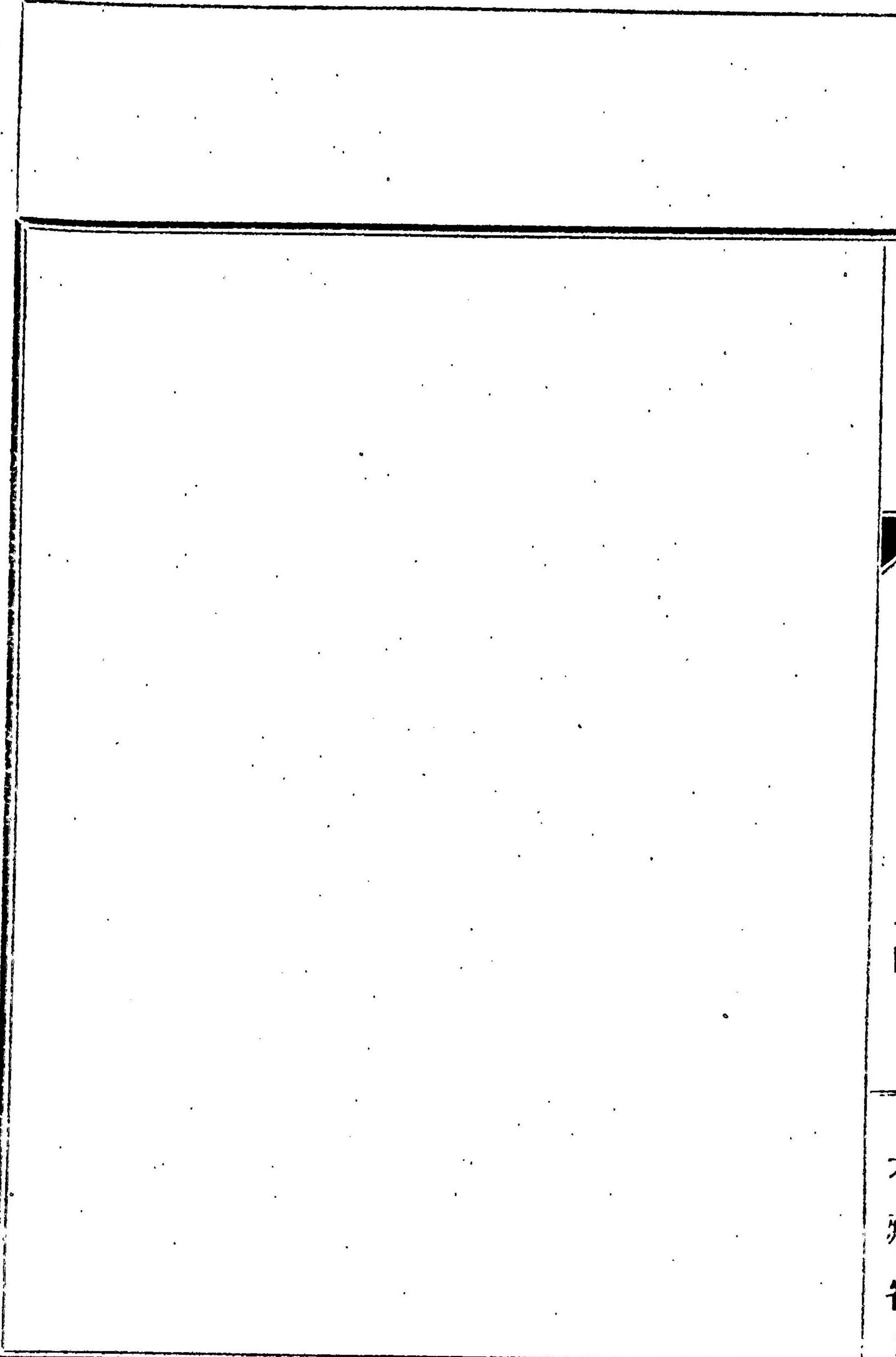
從八位下粟田直

正七位下大原史

朝野群載



大日本租界志 卷之九 租界地界



在京五條令解 申立賣買家地券文事  
合

地漆戸主漆丈壹尺肆寸

在左京五條四坊二町西二三四行北六七八内

立物屋捌宇

寢殿 廊 雜舍

右件家地依有物要限米千七十餘石凡絹二千二百疋沽却丹波守已畢仍為後日相副本券等立所



大日本... 卷之... 十五

券如件

永保三年十二月日

賣人文章生藤原

朝野群載

家地賣買券

左大辨家

沽與地貳戶主事

在左京五條三坊四町內 東西拾貳丈伍尺 南北捌

右件地者以去年閏六月比治部丞藤原季俊手所  
買領也而依有直要用限准米參佰石依仰旨相副  
本券所放與秦末武已畢仍為後日立所券文者

應德元年四月日

知家事大藏史生菅野

大日本... 卷之... 十五



令右京屬中原

別當散位源朝臣

朝野群載

隱田

按隱田又ハ陰田ト曰フシノヒタト訓ス或ハ絶戸ノ田ヲ隱没シテ之ヲ私スルアリ或ハ死亡ヲ隱シ公ニ還サハルアリ皆賊物ニ類似ス隱ニ禁戒スル所以ナリ

〔淳仁天皇天平寶字三年十二月四日〕武藏國田九百町備中國二百町ヲ隱沒ス便チ本道ノ巡察使ニ仰セテ勘檢セシム自餘ノ諸道巡察使田ヲ檢スルモ亦此ニ由ルナリ其使未タ國界ニ至ラズシテ豫メ自首スル者ハ罪ヲ免ス續日本紀類聚國史  
〔清和天皇貞觀十七年八月廿二日〕太政官處分ス左右京ノ絶戸田ヲ顯告スル者ハ顯告スル所ノ田ノ半ハ告人ヲシテ三年耕食スルコトヲ得セシメン若シ絶



戸田ヲ隱認シ他人ノ爲ニ告ケラル、者ハ律ニ依テ罪ヲ科セン三代實錄類聚三代格

沒官田

按中古以來吏民或ハ度ニ越エ制ニ違テ姦欺私利ヲ爲シ大ニ民政ニ害アリ是レ皆公法ノ容レサル所是ニ於テ嚴ニ沒收ノ法ヲ設ク又他ノ罪ヲ犯シテ其田地ヲ沒收スルモノアリ今其一ニ採録ス

嵯峨天皇弘仁三年五月三日勅諸國司公麻田ノ外水陸田ヲ營スル特ニ嚴制ヲ立テリ而シテ諸國朝憲ニ率ハス專ラ私利ヲ求メ百端姦欺一モ懲革無シ或ハ他人ノ名ヲ假テ多ク墾田ヲ買ヒ或ハ言ヲ王臣ニ託

シテ競テ腴地ヲ占ム民ノ業ヲ失フ此ニ由ラサルハ無シ若シ亦違犯スル者有ラハ見任ヲ解却シ違勅ノ罪ヲ科シ一ニ先勅ノ如クシ買田占地竝ニ亦官ニ沒日本後紀

清和天皇貞觀十七年十二月十五日庶人伴善男ノ沒官ノ墾田陸田山林庄家稻鹽濱鹽金等諸國ニ在リ皆京城ノ道橋ヲ造ル料ニ充ツ三代實錄

安徳天皇治承四年六月二十日園城寺ノ末寺ノ庄園等ヲ沒收ス百練鈔山槐記

按山槐記ニ據ルニ此事同年八月十八日ニ至リ恩免有テ其舊ニ復セラレ

八月十六日興福寺僧綱等ノ官ヲ解キ竝ニ私領等ヲ



沒收ス百練鈔  
山槐記

〔十一月八日〕源賴朝秀義ノ領所常陸國與七郡及ヒ太

田糟田酒田等ノ所々ヲ收公シ軍士勳功ノ賞ニ充ツ

東鑑

〔按〕秀義ハ佐竹冠者ナリ武備ヨリ攻取ノ時城ヲ  
棄テ與州ニ逃亡ス依テ其所領ヲ沒收シ以テ其  
功臣ニ  
配分ス

大日本租稅志卷之九終

正誤

第八卷

第九張左第四行

〔從五ノ下〔位〕ヲ脱ス

第十八張右欄外

〔皇子〕〔皇女〕ノ誤

第九卷

第十張右第九行

束ノ下〔五把〕ヲ脱ス



大正神皇正統記

卷四

大正神皇正統記



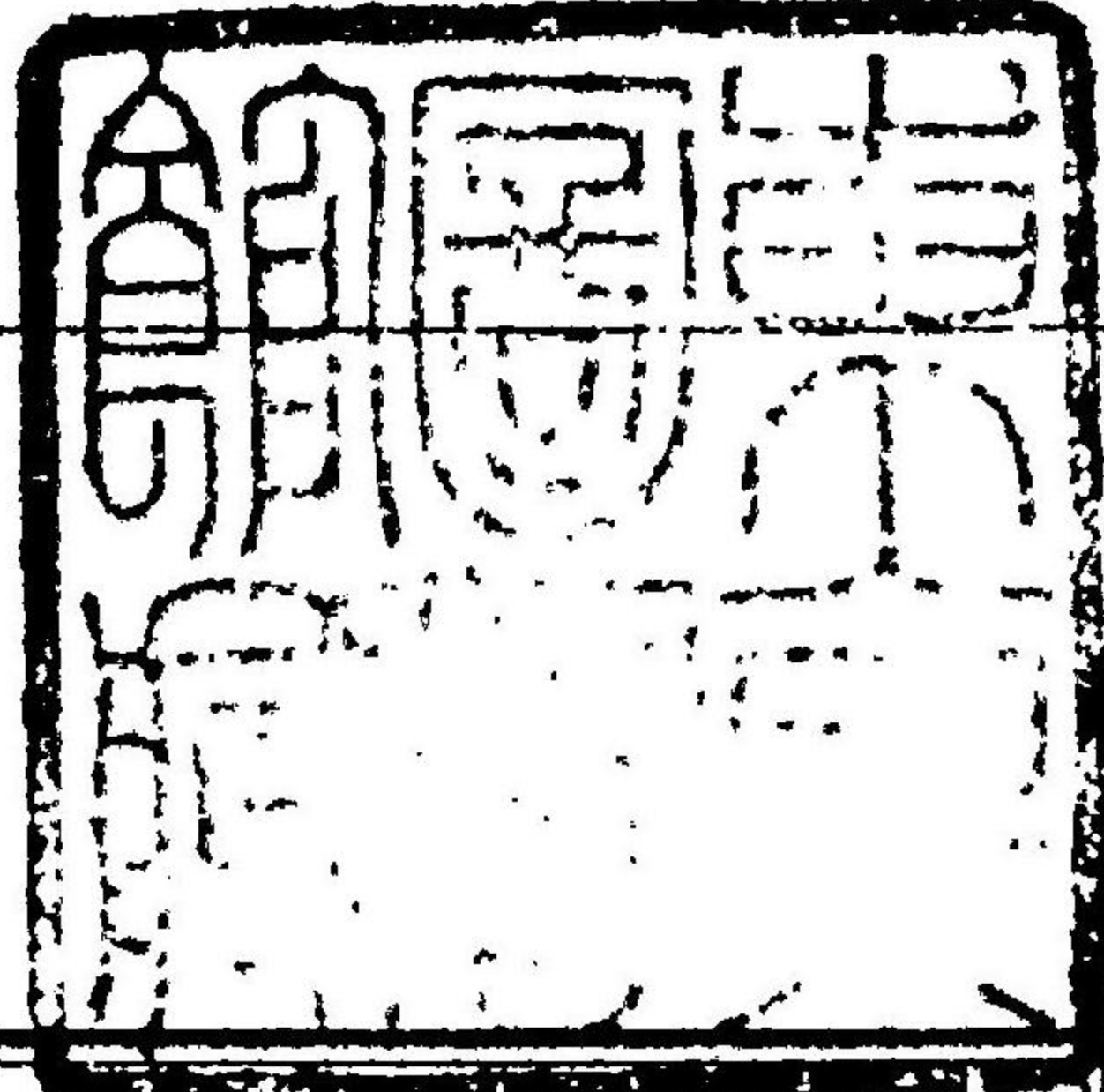
大日本租稅志

六

朝書園泉榮					
20册	26号	2架	0	西	屬類

16  
1-6





大日本租稅志卷之十

大藏權少書記官正七位野中準等修

前篇第二

自養和  
至慶應

田制總錄

按源賴朝天下ノ大勢ヲ一變ス然トモ田制ニ至  
 ナハ概テ舊貫ニ因仍ス而シテ班田等ノ制已ニ  
 廢絶シ所領知行等ノ地大ニ興レ北條氏式目  
 ヲ定メ頗ル百般ノ制度ヲ修ムト雖モ復々管目  
 田制ニ及フヲ聞カス但領主等公事段錢等ノ目  
 ヲ以テ民ユ取ル少カラズ民亦田地ノ段歩ヲ偽  
 リ以テ之ヲ防グ者多シ文應元年四月十三日ノ  
 太政官符ニ云テ作人等見作一町ヲ以テ僅ニ二  
 段ト稱スト以テ觀ル可キナリ足利義滿諸國ニ  
 令シテ田ヲ檢セシム概テ子苗貫ニ因襲シ改易ス  
 ル所ナシ唯租ヲ増シテ巨族大家諸國ニ割據シテ  
 既ニシテ巨族大家諸國ニ割據シテ

大日本租稅志 卷之十 大藏權少書記官正七位野中準等修



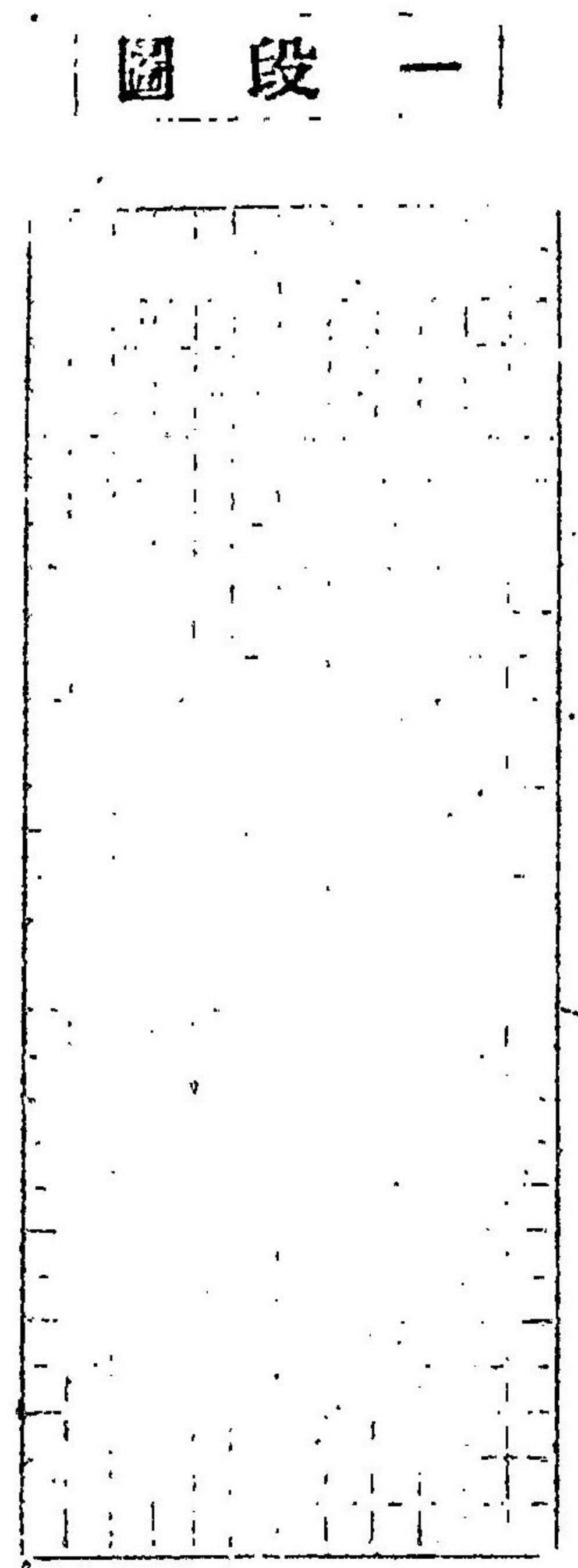




〔注〕法ハレル  
 ス進ハ奉ルナ  
 リ申フ記シテ  
 上ニ管ルヲ謂  
 フ  
 〔不〕耕作セサル  
 田地ヲ謂フ

寛元四年二月安藝國三角野村注進一町三段大内  
 不二段六十步定田一町一段半ナリ九段小内十二  
 坪ニ四段三百步十七坪ニ四段半ナリ七段大内廿  
 二坪ニ四段半廿四坪ニ三段六十步ナリ〔按〕大内半小ハ諸國多ク稱スル所然トモ未タ管ナ  
 政府ノ此制ヲ施スヲ聞カス蓋シ庶民便宜之ヲ  
 稱スルニ始ルナリ今本文ニ依テ之ヲ推算スル  
 ニ二段六十步一町一段百八十步ヲ合セテ一町  
 三段二百四十步ヲ得則チ二百四十步ヲ合セテ一町  
 ス又四段三百步四段二百八十步ヲ合セテ九段百  
 二十步ヲ得則チ内三段六十步ト四段八十步ト  
 百四十步ノ内則チ三段六十步ト四段八十步ト  
 歩ノ殘ヲ得則チ百八十步ト四段八十步ト  
 北條足利ノ世盛ニ行レ豊臣氏ノ檢地ニ至リ三

百歩ヲ以テ一段ト爲ス爾後大半小亦其歩ヲ減  
 シ大ハ二百歩半ハ百五十歩小ハ百歩トナレリ  
 然トモ檢セサルノ地ハ猶舊法ニ依リ以テ明治  
 ノ初ニ至レリ坪ノ稱ハ嘉保ノ時ヨリ當時ニ及  
 テ之ヲ價用ス其制復タ異ナル所ナシ今本文ニ  
 據テ大半小ノ圖ヲ作ルコト左ノ如シ

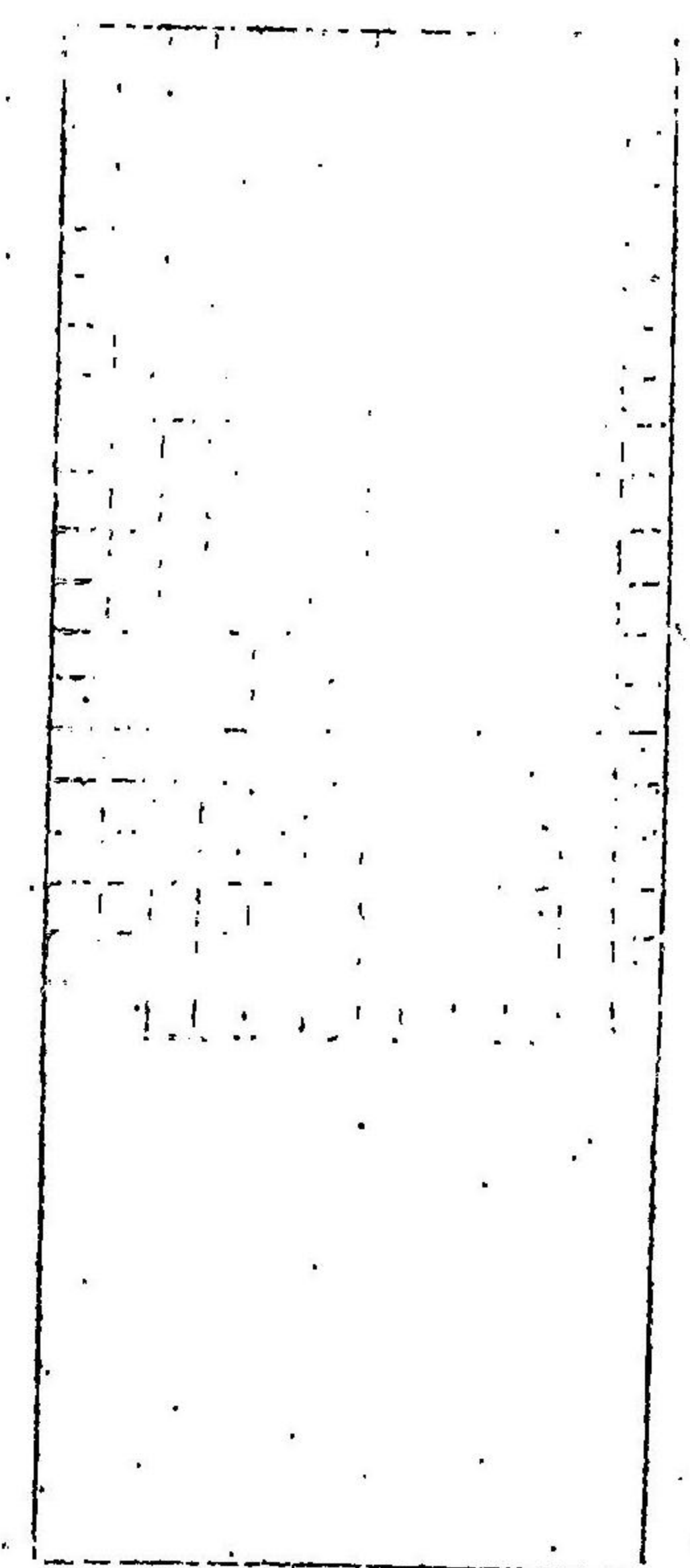


三百六十步

大日本新編  
 卷之十  
 二  
 大日本新編

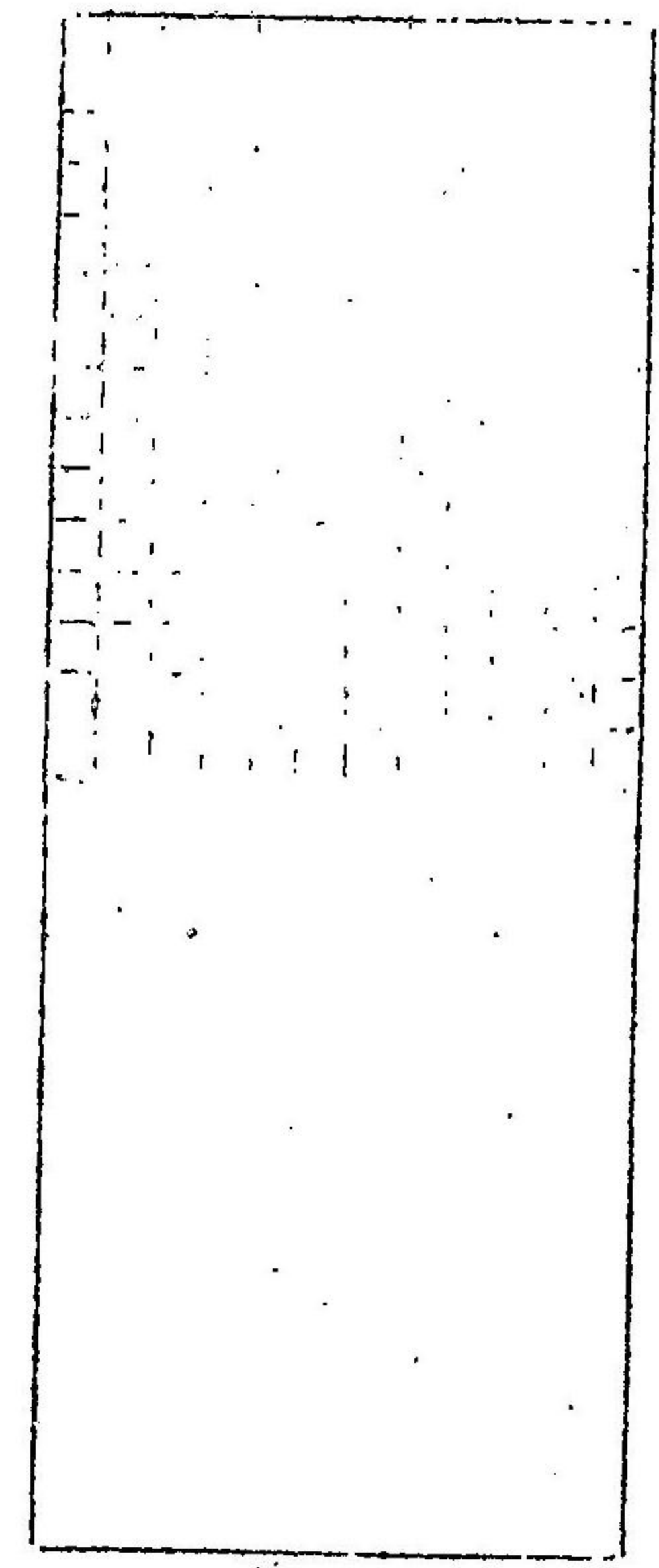


大圖



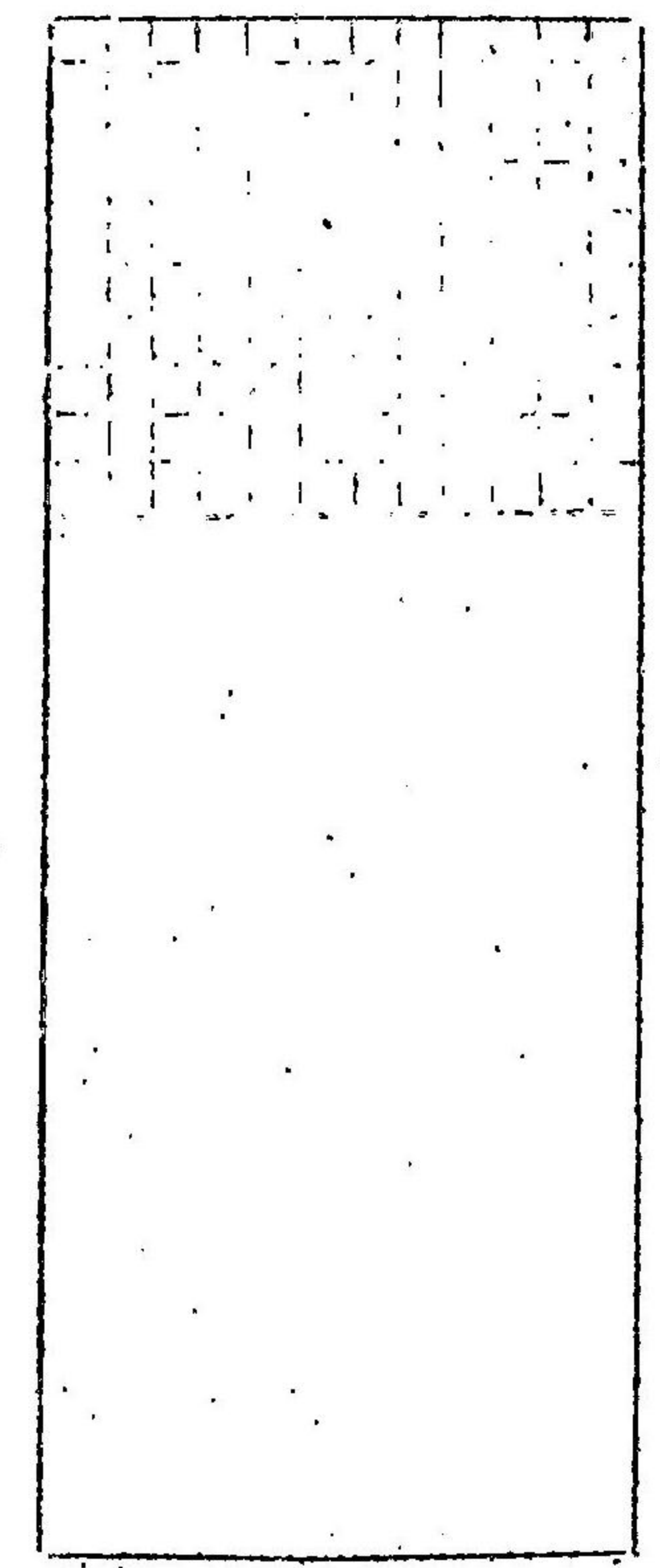
二百四十步

半圖



百八十步

小圖



百二十步

〔檢注〕田ヲ檢シ  
テ記注スルナ  
リ  
〔符田〕損田ニ割  
シテ計フ即チ  
取獲アルノ田  
ナリ

龜山天皇文應元年四月十三日太政官符攝津國守中  
原師藤今月六日ノ奏狀ヲ得ルニ曰ク謹テ案内ヲ檢  
スルニ當國ノ例檢田使入部ノ日町段ノ法ニ任セ檢  
注セント欲スルニ作人等見作一町ヲ以テ僅ニ得田  
二三段ト稱シ尙又其二三段ヲ以テ半損ノ裁ヲ乞フ  
國使若シ其事ニ背ケハ作人等權門ノ威ヲ假リ猥ニ

大日本利秋志 卷之十 三 大隈省



其政ヲ遂ケサラシム所行貪婪ノ甚キナリ官物ノ減  
 少只此事ニアリ望請フ天恩檢田ノ時永ク作人等ノ  
 濫行ヲ停止シ其務ヲ遂ケシメン勅ス先例ニ任セ請  
 ニ依レ固本

〔按〕北條氏ノ時人民貪婪權門土豪ノ威ヲ假リ以テ田地ヲ誣罔スルモ多シ當時ノ諸文書ヲ閱スルニ此類諸國夥カラシ今其一端ヲ舉クルノミ

〔田地總町步〕

畿内

- 山城 八千九百六十一町
- 大和 七千五町七段
- 河内 一萬九百七十七町

- 和泉 四千百二十六町
- 攝津 一萬千三百十四町

東海道

- 伊賀 四千五十五町
- 伊勢 一萬九千二十四町
- 志摩 四千九百十七町
- 尾張 一萬千九百三十町
- 參河 七千五十四町
- 遠江 一萬二千九百六十七町
- 駿河 九千七百九十七町
- 伊豆 二千八百十四町



甲斐 一萬四十三町

相摸 一萬千四百八十六町

武藏 五萬千五百四十町

安房 四千三百六十二町

上總 二萬二千三百六十六町

下總 三萬二千三十八町

常陸 四萬二千三十八町

東山道

近江 三萬三千四百五十町

美濃 一萬五千三百四町

飛驒 千三百五十六町

信濃 千六百五十六町

上野 二萬八千五百三十四町

下野 二萬七千四百六十町

陸奥 四萬五千七十七町

出羽 三萬八千六百二十八町五段

北陸道

若狹 三千百三十九町

越前 二萬三千五百七十六町

加賀 一萬二千五百三十六町

能登 八千四百七十九町

越中 二萬千三百九十九町



越後 二萬三千七百三十八町  
佐渡 四千八百七十町

山陰道

丹波 一萬八百五十町  
丹後 五千五百三十七町  
但馬 七千七百四十三町  
因幡 八千十六町  
伯耆 八千八百四十二町  
出雲 九千九百六十八町  
石見 四千八百七十二町  
隱岐 六百二十四町

山陽道

播磨 二萬千二百三十六町  
美作 一萬千六百十六町  
備前 一萬三千二百六町  
備中 一萬八百八十三町  
備後 九千二百九十八町  
安藝 一萬七千八十四町  
周防 七萬六百五十七町  
長門 四千七百六十九町

南海道

紀伊 七千百十九町



淡路 二千八百七十町

阿波 五千二百四十五町

讃岐 一萬七千九百四十三町

伊豫 一萬四千八百二十五町

土佐 六千七百七十三町

西海道

筑前 一萬九千七百六十五町

筑後 一萬千三百七十七町

肥前 一萬三千四百六十二町

肥後 一萬三千四百六十二町

豊前 一萬三千二百二十一町

豊後 七千五百七十町

日向 八千二百九十八町

大隅 四千七百七町

薩摩 五千五百二十一町

壹岐 六百二十町

對馬 六百二十町

拾茶

〔按〕拾茶抄ノ成ル足利義政ノ時ニ在リ其書タレ  
多ク前代ノ事ヲ記ス田地ノ段歩亦足利氏以前  
ニ係ルモノ、如シ因テ此ニ揚ク各國町歩ノ合  
計九十四万六千十六町二段トス之ヲ和名鈔  
スル所ニ比較スルニ相距ル四百年許ニシテ町  
歩ノ増益スルコト八萬三千二百九十町餘トス  
蓋シ鎌倉府ノ時國家間段諸國開ノ際抄カラ  
ス人民私墾ノ田亦頗ル多キニ由テ然ルナリ

〔北〕後光嚴天皇應安元年征夷大將軍足利義滿諸國ニ

〔征夷大將軍〕職  
原抄ニ云文尾



紹元以來征勇  
將軍ノ號有リ  
ト曰シテ其大  
將軍ト稱スル  
ハ源賴朝ニ始  
ル邊ニ以テ海  
内ノ兵權ヲ握  
ルノ職トナレ

令シテ田ヲ檢ス成形圖

〔按〕足利氏檢地ノ法其詳ナルコト徵スヘカラス  
當時ノ文書幾段三百餘十歩ノ文アリ共三百六  
十歩ヲ以テ一段ト爲シ曲尺方六尺ヲ以テ  
一步ト爲ス皆舊制ニ依ルコト推知スヘシ

〔田地總町步〕

畿内

- 山城 一万七千七百五町
- 大和 一万七千八町
- 河内 一万九百七町
- 和泉 四千一百二十六町
- 攝津 一万一千三百十四町

東海道

- 伊賀 四千五十一町
- 伊勢 一万九千二十四町
- 志摩 一百二十四町
- 尾張 一万六町
- 參河 七千五十五町
- 遠江 一万二千九百二十町
- 駿河 九千一百五十町
- 伊豆 一千八百三町
- 甲斐 一万四千三町
- 相模 一万一千四百八十七町
- 武藏 三万六千一百九十一町



安房 一千三百六十四町

上總 二万三千六百六十町

下總 三万三千町

常陸 一万二千三十八町

東山道

近江 三万五千二十五町

美濃 一万五千三百四町

飛驒 一千二百五十六町

信濃 一千三百六町

上野 三万八千五百四十四町

下野 三万七千四百六十町

陸奥 四万五千七十七町

出羽 數關

北陸道

若狹 三千一百三十町

越前 二万三千五百六十六町

加賀 一万二千五百三十六町

能登 一万二千五百三十町

越中 二万三百九十九町

越後 二万三千七百三十八町

佐渡 三千八百七十町

山陰道



丹波 一万八千五十五町

丹後 五千五百二十七町

但馬 七千七百四十三町

因幡 八千六十町

伯耆 八千八百四十町

出雲 九千九百六十八町

石見 四千八百七十町

隱岐 六百三十四町

山陽道

播磨 二万一千四百十四町

美作 一万六百十六町

備前 一万三千三百六十町

備中 一万八千三町

備後 九千六百五十八町

安藝 七千四百八十町

周防 七千六百五十四町

長門 四千七百十六町

南海道

紀伊 七千二十九町

淡路 二千八百七十町

阿波 五千二百四十五町

讃岐 一万七千九百四十三町



伊豫 一万四千八百二町  
土佐 六千三百二十八町

西海道

筑前 一万一千七百六十町  
筑後 二万二千八百二十八町  
肥前 一万二千三十二町  
肥後 一万三千七百八十三町  
豊前 一万二千七百六十五町  
豊後 一万一千二百二十八町  
日向 七千二百四十七町  
大隅 五千八百十四町

薩摩 一万四千六百二十町

壹岐 五百八十三町

對馬 五百五十九町

〔舊〕節川築ハ林逸ノ著ス所逸ハ文明明應ノ時ノ  
人ナリ記スル所田地ノ總數蓋シ足利義滿以後  
ニ係ル因テ此ニ攝職ス各國町歩ノ合計凡ソ八  
拾五萬四千七百一十一町但出羽國ハ其數別クト  
雖モ三四萬町許トスルニ過キス而シテ拾芥ト  
載スル所ヨリ觀スルコト九萬千三百町餘トス  
是レ元弘以來戰國日久ク爲ニ諸國ノ  
田地荒蕪ニ屬スル者多キニ由レルカ

〔應〕永廿五年二月廿八日〔筑〕後國大善寺領坪付一所

五段此斗代壹石ナリ古文集錄

〔天〕正中瀧川一益地ヲ勢州ニ檢ス諸家皆之ニ做フ

勢州軍記

〔坪〕付地ノ坪町  
段租額人名等  
ヲ明記セシモ  
ノナリ當時坪  
ハ猶舊保ノ時  
ノ制ニ依レリ  
〔斗〕代乃チ石盛  
ニレテ某地ノ



萬石斗ニ當ル  
ヲ謂フ  
〔天正中〕年月詳  
ナラス一登ハ  
織田氏ノ將  
ナルヲ以テ此  
ニ指録ス

〔後陽成天皇天正十五年六月六日〕關白豐臣秀吉佐々  
成政ヲシテ肥後ヲ領セシメ而シテ三年地ヲ檢スル  
ヲ禁ス太閤

〔按〕豐臣氏將ニ諸國ノ地ヲ檢セントス獨肥後國  
ニ禁スルモハ何ソヤ蓋シ此時土民亂ヲ作シ  
未タ安堵ニ至ラス須ラク寛貸以テ之ヲ待ツヘ  
シ且成政疎暴民ヲ馭スル恐クハ苛虐失政ノ患  
アラシク之ヲ禁  
スル所以ナリ

〔十七年〕秀吉全國ノ田租地ヲ檢ス享祿以來  
〔按〕應仁以來海内鼎沸田地錯亂シ且農民段歩ヲ  
詐リ以テ逋租ノ計ヲ爲スモノ有リ豐臣氏已ニ  
海内ノ大半ヲ掌握ス是ヲ以テ田地ヲ檢シ以テ  
平均ヲ取リ歲入ヲ増サント欲ス然トモ關以東  
未タ服從セス奚ソ即チ全國ニ及フヲ得ン但此  
ニ着手スルノミ而シテ後世或ハ天正文祿ヲ以  
テ兩回ノ檢地トシ其法ヲ  
ニニス恐クハ非ナラシム

關八州古戰錄  
十七年ニ作ル  
今北條五代記  
ニ從フ同書陸  
奥一國ノ檢地  
ト爲ス今古戰  
錄ニ從フ  
〔分米〕段歩ノ石

〔八月〕豐臣秀吉其所領尾州三州等ノ地ヲ檢シ租二  
萬石ヲ減ス太閤

〔按〕此時兵亂日久シク民其業ニ安セヌ田ノ荒廢  
其タ多シ其租ノ減スル即チ水陸田ノ減スルナ  
リ

〔同上制條〕檢地ノ時隣郷ノ經界ハ先規ノ如クタル  
可シ昔ハ田畠タリト雖モ今變改セハ高ニ結フ可  
ラス増減ハ其實ニ隨テ沙汰ス可シ太閤

〔十八年〕秀吉淺野長政石田三成大谷吉隆ヲシテ奥羽  
二州ノ地ヲ檢セシム關八州古戰錄

〔十九年十二月二十日〕出雲國神門郡求院村坪付田  
數四町壹段小三拾歩分米貳拾六石壹斗四升畠數



高橋斗ニ當ル  
ヲ謂フ  
〔天正中〕年月詳  
ナラス一益ハ  
織田氏ノ將  
ナルヲ以テ此  
ニ掲録ス

後陽成天皇天正十五年六月六日關白豐臣秀吉佐々  
成政ヲシテ肥後ヲ領セシメ而シテ三年地ヲ檢スル  
ヲ禁ス本問

〔按〕豐臣氏將ニ諸國ノ地ヲ檢セントス獨肥後國  
ニ禁スルモノハ何ソヤ蓋シ此時土民亂ヲ作シ  
未タ安堵ニ至ラス須ク寛貸以テ之ヲ待ツヘ  
シ且成政疎暴民ヲ馭スル恐クハ苛虐失政ノ患  
アラシク所以ナリ

〔十七年〕秀吉全國ノ田租地ヲ檢ス享祿以來

〔按〕應仁以來海内鼎沸田地錯亂シ且農民段歩ヲ  
詐リ以テ租ノ計ヲ爲スモノ有リ豐臣氏已ニ  
海内ノ大半ヲ掌握ス是ヲ以テ田地ヲ檢シ以テ  
平均ヲ取リ歲入ヲ増サント欲ス然トモ關以東  
未タ服從セス奚ソ即チ全國ニ及フヲ得ン但此  
ニ着手スルノミ而シテ後世或ハ天正文祿ヲ以  
テ兩回ノ檢地トシ其法ヲ  
ニニス恐クハ非ナラン

〔八月〕豐臣秀次其所領尾州三州等ノ地ヲ檢シ租二  
萬石ヲ減ス本問

〔按〕此時兵亂日久シク民其業ニ安セス田ノ荒廢  
其々多シ其租ノ減スル即チ水陸田ノ減スルナ  
リ

〔同上制條〕檢地ノ時隣郷ノ經界ハ先規ノ如クタル  
可シ昔ハ田畠タリト雖モ今變改セハ高ニ結フ可  
ラス増減ハ其實ニ隨テ沙汰ス可シ本問

〔十八年〕秀吉淺野長政石田三成大谷吉隆ヲシテ奥羽  
二州ノ地ヲ檢セシム關八州古戰錄  
北條五代記

〔十九年十二月二十日〕出雲國神門郡求院村坪付田  
數四町壹段小三拾歩分米貳拾六石壹斗四升畠數

關八州古戰錄  
十七年ニ詳ル  
今北條五代記  
ニ從テ同書陸  
奥一國ノ檢地  
ト爲ス今古戰  
錄ニ從フ  
〔分米〕段歩ノ石



高ナリ  
〔分錢〕錢ヲ以テ  
段歩ノ高トナ  
スヲ認フ

〔百出〕邑ノ名ニ  
後因連見澤ニ  
在リ

壹町五段半三拾歩分錢三貫八百七拾三文米ニシ  
テ合米三拾石壹升壹合出雲國神門郡 院村文書  
〔移〕此田壹段分米六斗三升一合餘畠一段分錢式  
百四拾八文餘錢壹貫文ヲ以テ米壹石弱ニ充ツ  
〔文祿二年〕秀吉山口立藩宮部法印ヲシテ豊後ノ地ヲ  
檢セシム碩田叢話 豐西記

〔按〕秀吉地ヲ檢スル間マ法ヲ異ニスル者アリ豐  
後ノ檢地ヲ以テ知ルヘン其故老ノ口碑ニ存ス  
ル所ニ據レハ山口立藩ハ六尺竿ヲ用ヒ宮部法  
印ハ六尺五寸ヲ用フ又豐西記ニ云畑三段ヲ以  
テ田一段ニ准シ町數ヲ定ム之ヲ三段引ト曰フ  
ト又陸奥ノ地ヲ檢スルニ其百歩ニ足ラサル者  
ハ之ヲ拾テ稅セス之ヲ見捨ト曰フ蓋シ  
時ニ共宜キヲ懸テ而シテ處分スルナリ

〔同上〕日出高成上村ノ上田ハ壹段ニ付米壹石六斗中  
田ハ壹石四斗下田ハ壹石貳斗上畠ハ壹石四斗中畠

ハ壹石貳斗下畠ハ壹石中村ノ上田ハ壹段ニ付米壹  
石五斗中田ハ壹石三斗下田ハ壹石壹斗上畠ハ壹石  
三斗中畠ハ壹石壹斗下畠ハ九斗下村ノ上田ハ壹段  
ニ付米壹石四斗中田ハ壹石貳斗下田ハ壹石上畠ハ  
壹石貳斗中畠ハ壹石下畠ハ八斗ナリ又一ニ上村ノ  
上田ハ壹段ニ付米壹石六斗中田ハ壹石五斗下田ハ  
壹石四斗上畠ハ壹石四斗中畠ハ壹石三斗下畠ハ壹  
石貳斗中村ノ上田ハ壹段ニ付米壹石四斗中田ハ壹  
石三斗下田ハ壹石貳斗上畠ハ壹石四斗中畠ハ壹石  
壹斗下畠ハ壹石下村ノ上田ハ壹段ニ付米壹石貳斗  
中田ハ壹石壹斗下田ハ壹石上畠ハ壹石中畠ハ九斗



〔屋敷〕宅地ナリ

下畠ハ八斗ナリ 豊後國 檢地帳

〔三年六月十七日〕秀吉檢地條例田畠屋敷ハ六尺三寸ノ竿ヲ以テ三百歩ヲ一段トシ檢地スヘシ上田ハ壹石五斗中田ハ壹石三斗下田ハ壹石壹斗下々ハ照料シテ之ヲ定ムヘシ

上畠ハ壹石貳斗中畠ハ壹石下畠ハ八斗下々ハ照料シテ之ヲ定ムヘシ

屋敷ハ一石二斗タルヘシ

山畠野畠河原畠ハ先斗代ヲ問ヒ其上照料シテ斗代ヲ定ムヘシ

右ノ斗代ヨリモ上ハ先斗代ノ如クタルヘシ

在々ノ上中下竝ニ井懸リ麥田日損水損ヲ熟視シテ斗代ヲ定ムヘシ 伊勢國 檢地帳

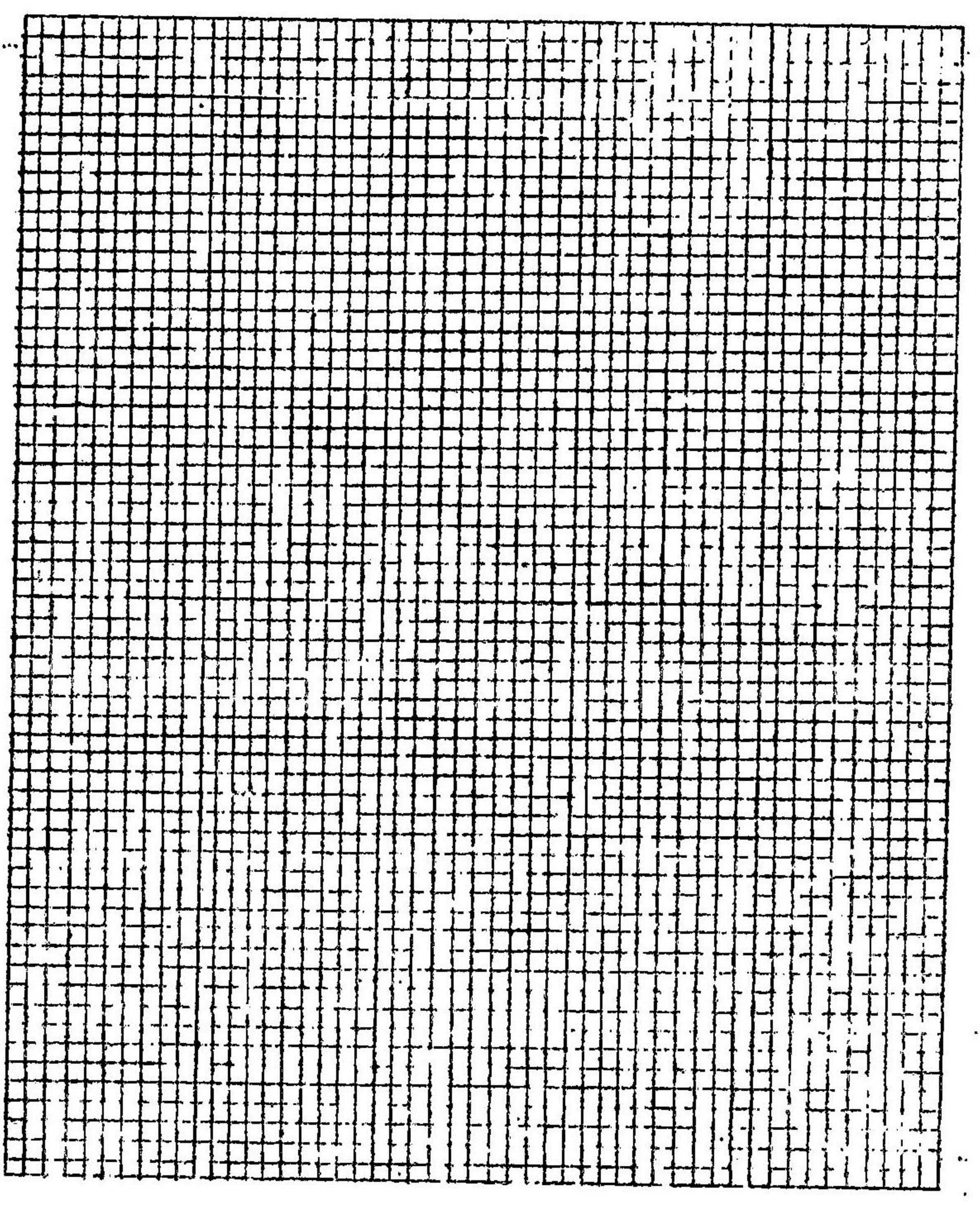
〔按〕文祿ノ檢地一年半季ノ得テ了スル所ニ非ス故ニ豊後ニ在テハ二年トシ伊勢ニ在テハ三年トシ多聞院日記ハ四年トス皆其地ニ依テ前後アルノミ其田制ハ三百歩ヲ以テ一段トシ方六尺三寸ヲ以テ一步トス三州志ニ云テ正九年續田信長菅谷福富兩氏ヲシテ能登國ノ地ヲ檢セシメ三百歩ヲ一段トス凡例録ニ云テ足利尊氏ノ時宅ニ是制有リト而シテ其海内一般ノ制ト爲スハ實ニ此時ヲ始トスルナリ今本 文ニ依テ圖ヲ製スルコト左ノ如シ



大日本... 卷之...

一町三千步一段三百步

文 祿 制 地 圖



點線ハ和銅制地一町ノ周圍ナリ

一步廣尺五尺三寸

〔所務〕解中篇ニ  
見エタリ

〔慶長二年三月廿四日〕長曾我部元親制條所々ニ於  
テ田ヲ畠屋敷ト爲スハ南事ナリ然ル上ハ水田ニ  
同ク所務ヲ召ス可シ長曾我部元親百箇條

〔慶長三年秀吉檢地條例〕越前國檢地條○文祿三年ノ檢地條例ニ同シ之ヲ累ス  
〔同上越前國吉田郡藤島郷福葛村檢地〕

上田二段七畝十步 四石九斗二升

〔二段分米一石八斗〕

上田五段七畝十五步 十石三斗五升

〔同分米一石八斗〕

中田荒一段 一石七斗

中田三畝十步 五斗六升六合

大日本... 卷之...



〔同分米一石六斗九升八合〕

上島二段八畝五步 一石八斗二升五合

〔二段分米六斗四升八合弱〕

中島荒二段四畝 三石三斗六升

〔同分米一石四斗〕

屋敷二十步 一斗一升二合

〔二段分米一石六斗八升〕

以上

一石八斗代

上田十五町三段七畝 分米二百七十六石六斗六升

一石七斗代

中田三畝十步 同五斗六升

中田荒九段二十步 同十五石四斗

一石五斗代

上島一町二段七畝五步 同十九石七升五合

一石四斗代

中島三畝五步 同四斗四升

一石四斗代

中島永荒二段半十五步 同三石五斗七升

一石七斗代

屋敷八畝 同一石三斗六升

分米合三百十七石六升五合 越前國檢地帳



〔六年〕淺野長政所領紀伊國ノ地ヲ檢ス田畠九千二百四十七町八段二畝廿三步其高三十七万四千二百四十五斛ナリ淺野家文書

〔明正〕天皇寛永十九年八月十日〔征夷〕大將軍德川家光令來年ヨリ本田ニ煙草ヲ作ルヘカラス若シ作ル者アラハ新田ヲ開キ作ル可シ慶延令條

〔按〕合類大節用集ニ云煙草ハ慶長中種ヲ南蠻ニ得ルト爾來人民之ヲ嗜ム是ニ於テ各地競テ其種子ヲ求テ栽培シ田畑ニ墾殖セシム官其將來益盛ニシテ終ニ稻田ノ減縮セシムコトヲ恐ル是等ノ禁有ル所以ナリ

三十年三月十一日〔令〕五穀ノ費トナルヲ以テ當年ヨリ本田畑新田畑トモ一切烟草ヲ作ルヘカラス教令類纂

〔圖〕長六尺ヲ稱ス

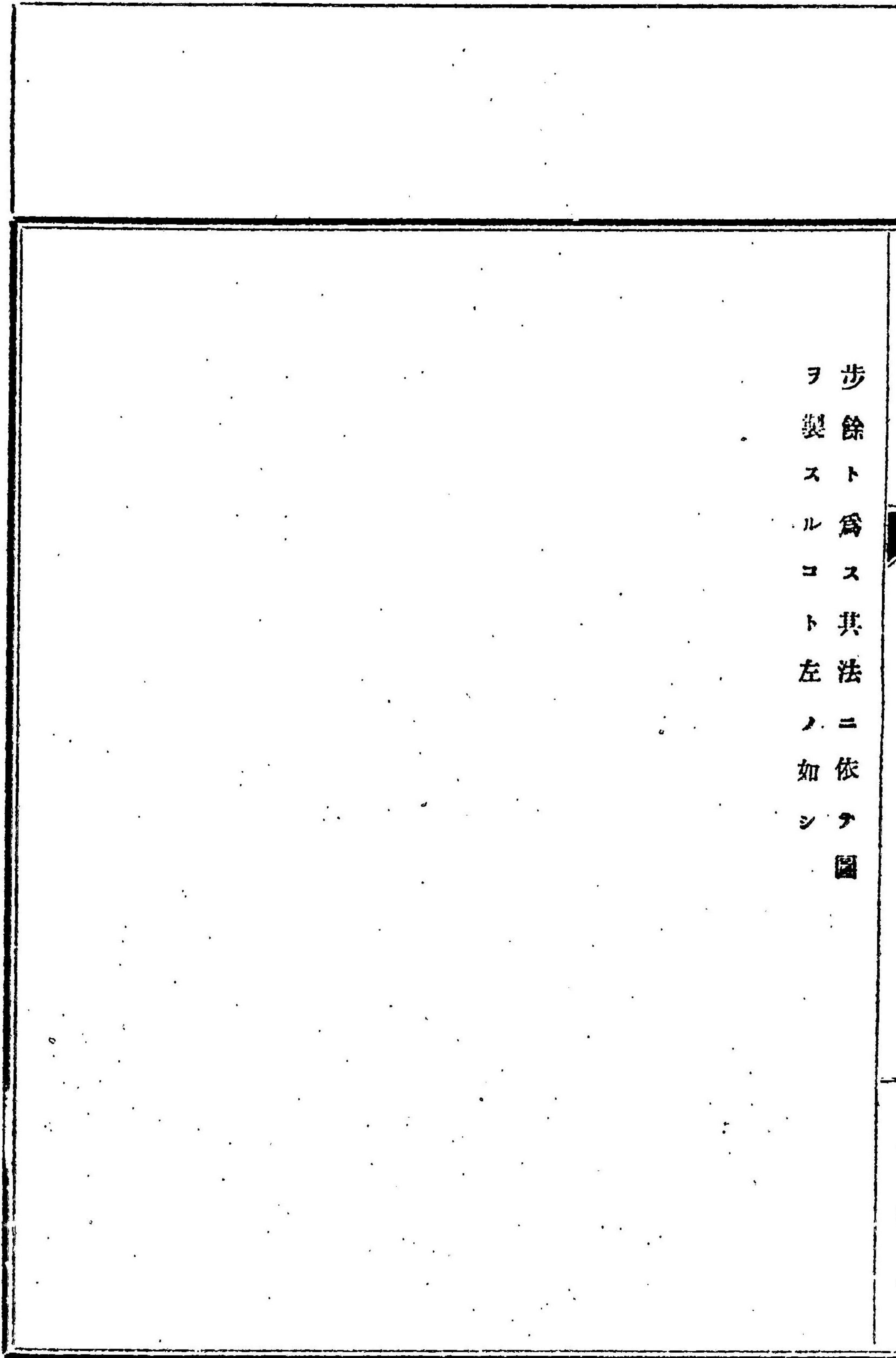
〔靈元〕天皇延寶六年三月〔德川〕家綱伊豆國田方加茂那賀君澤四郡十八村ノ地ヲ檢ス檢地定例  
〔同上〕檢地條例間竿ハ一間六尺一分ニ定メ煤竹ヲ能ク揉メ間繩ハ其延縮ヲ檢查シ豎横寸尺ヲ打立テ寸ヲ捨テ尺マテヲ勘定ス可シ

〔按〕凡例條ニ云文祿年中マテ古檢ト曰ヒ慶長元和以降ヲ新檢ト曰フ古檢ハ方六尺三寸ヲ歩トシ新檢ハ方六尺ヲ歩ト爲スト然トモ慶長元和ノ間恐クハ未タ速ニ田圃ヲ丈量スルニ暇アラヌ且當時ノ水帳文書等未タ新檢ノ法アルヲ見ス而シテ方六尺一分ヲ歩ト爲スコト始テ茲ニ見エタリ則チ是時ヲ以テ新檢ノ始トスルカ地方取扱ニ云量杖ノ打方三尺マテヲ打入レ三尺以内ハ民ノ徳分トスト其丈量ノ際必シモ分寸ニ拘々ヲサルト知ルハシ今方六尺一分ノ一步ヲ以テ六尺三寸ノ一步ニ比較スルニ一段ノ積ニテ千七百九十方尺九七ヲ減ス則チ二十九



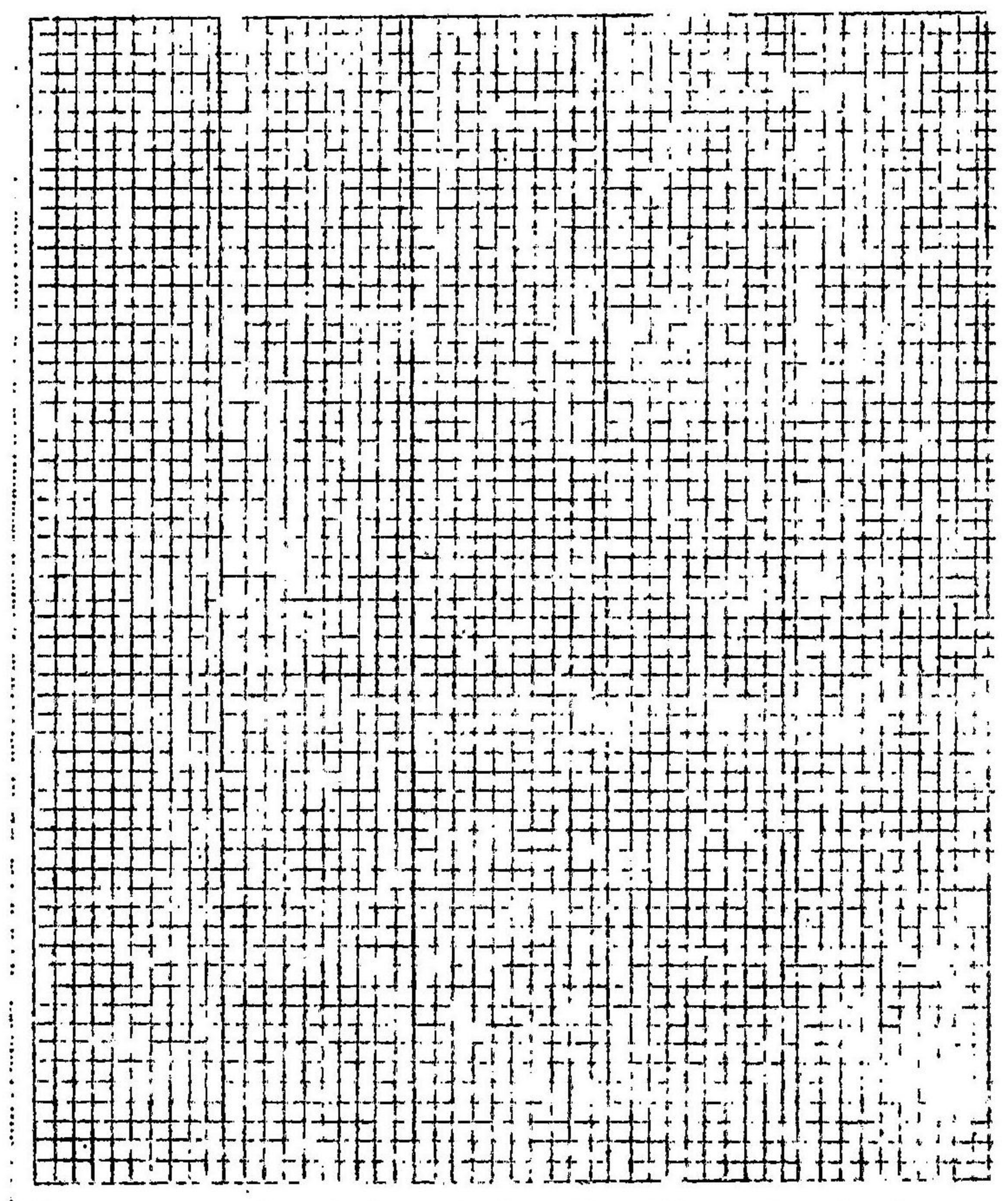
大日本地誌 卷之十一 十九 大坂府 大坂

步餘ト爲ス其法ニ依テ圖ヲ製スルコト左ノ如シ



延實地制圖

一町三千步一段三百步



點線ハ文祿制地一町ノ周圍ナリ

一步四尺六分二分

大日本地誌 卷之十一 十九 大坂府 大坂



〔畷〕界ナリ畷ヲ並  
ブルヲ畷ト爲  
ス  
〔棚田〕山田段ヲ  
爲シ棚ノ如キ  
モノヲ謂フ

〔敷庭〕敷ハ屋敷  
ナリ敷庭トハ  
宅地ノ四邊ヲ  
謂フ

畑境ノ畷ハ之ヲ除キ田中ノ畷ハ打入ルヘシ畑境共  
畷植ノ所マテ檢地スヘシ  
棚田ノ畷ハ總テ之ヲ除キ山ノ尾ニアル片下リノ畑  
ハ勾倍ヲ考ヘテ檢スヘシ  
漆桑楮茶蜜柑柿等ハ總テ段歩ノ内ニ打入ルヘシ  
田畑ニ上中下ヲ定ムルコト其地面大ナルモハ四  
方トモニ檢査シテ之ヲ定ム可シ土ノ善惡敷廻リ井  
溝ノ近所日當リ山蔭野端レ流ノ末片下リ北向キ濕  
氣冷場水旱損場等種々ノ差別アル可シ必シモ當作  
ノ佳惡ニ依ラス  
島畑ハ率子一位ヲ下ク可シ但將來田ト成ル可キ所

〔畔〕邪背ク口田  
邊隔ヲ爲スモ  
ノヲ謂フ又曰  
ク田界ナリ

〔坪〕近古以來一  
歩ノ地ヲ稱ス

又ハ廣大ナル島畑ハ地面ニ隨フヘシ田ニ屬セル畑  
畔ヲ掘リ五歩七歩ノ田ト爲スハ畑ノ内ニ加ヘ堀田  
ト稱スヘシ  
在來ノ道溝畷畔等新ニ廣クスル所アラハ田畑ノ内  
ヘ打入レ速ニ注進スヘシ必ス曲事申付クヘシ  
〔貞享三年三月〕徳川綱吉上野國沼田郡ノ地ヲ檢ス  
〔同上檢地條例〕間竿ハ六尺タリト雖モ二間竿一間毎  
ニ一分ヲ加ヘ來ルヲ以テ長サ一丈二尺二分竿ヲ以  
テ檢ス可シ勿論一段歩ハ三百坪タルヘシ

大日本地租院誌 卷之十 三十一 北 政 省



〔位付〕田ノ品位ヲ定ムルヲ謂フ

〔按〕六尺ニ一分ヲ加フルモノ俗之ヲ稱シテ沙摺ト曰フ蓋シ間竿ノ端沙石ノ爲ニ誤信スルヲ以テ之ヲ加フルノミ

田畑ノ位付ハ率子上中下ノ三等トス此回ハ檢査ノ上地ノ善所ハ上々ヲ一等ト爲シ地ノ惡所ハ又下々ノ一等ヲ立テ下々ノ内一二ノ位ヲ定メ上々上中下下々ノ五等ト爲スヘシ  
畑ノ漆桑楮茶園等アル所ハ其檢地ヲ除キ別ニ年貢ヲ申付クヘシ  
田畑ノ内ニ大石大木アリ其他耕作シ難キ所ハ檢査ノ上檢地ヲ除クヘシ  
田畑ノ石盛位付ハ隣村ノ盛ヲ考へ甲乙ナキヲ要ス

山方野方ノ村ハ格別ナルヲ以テ其着意アル可シ尤モ用水惡水ノ懸ケ引キ早水損傷藪林ノ日蔭日向等マテヲ考へ位付ヲ致ス可シ

〔按〕凡例錄ニ云田畑ヲ檢地シ上中下ノ地位ヲ分チ上田一段歩ニ石盛幾箇中下幾箇ト定メ段別ニ石高ヲ盛リ付ルニ石盛ト名ク又石盛ノ付方ハ作毛ノ善惡ヲ視テ三四所モ坪菊ヲナシ一坪ニ平均糶一升有レハ一町三千歩ニ糶三十石五合摺ニシテ米十五石有ルニハ乃チ上田八十石盛ノ高低ハ乃チ地位ノ異ナル所以ナリ

〔東山〕天皇元祿七年四月〔德川〕綱吉飛驒國ノ地ヲ檢ス  
牧民  
金鑑

〔同上〕檢地條例間竿ハ二間竿タルヘシ但一間毎ニ一分ヲ加へ來ルヲ以テ一丈二尺二分竿ヲ以テ檢ス可



〔歩〕奇零ヲ勾  
合シテ歩數ヲ  
定ムルヲ謂フ

シ一段ハ三百坪タルヘシ

檢地ハ半間マテニテ尺寸ハ打ツニ及ハス然トモ田  
畑豎横ノ廣狹ニ隨ヒ或ハ平均ニナス等ノ分ハ尺マ  
テハ用ヒ歩詰ハ勘定ニ入ルヘシ其歩詰ハ四釐餘マ  
テハ之ヲ捨テ五釐ヨリ壹分ニ入ルヘシ

〔按〕延寶中ノ檢地ニハ寸ヲ捨ルト曰ヒ此ニ半間  
マテニテ尺寸ハ打ツヘカラスト曰フ彼此法ヲ  
異ニスル此ノ如シ是レ地方ノ慣習  
斟酌スヘキ所アリテ然ルナルヘシ

田畑ノ位付ハ概子上中下ノ三等トス此回ハ檢査ノ  
上特ニ善キ所ハ上々田又ハ藪田麻田等ヲ一等ト爲  
シ其石盛ハ上ヨリ一斗許ヲ加ヘテ之ヲ定メ惡キ所  
ハ下々田或ハ山田砂田谷田等ノ等級ヲ立テ下々一

斗或ハ二斗三斗トシ石盛ヲ下ケ之ヲ定ム可シ畑ハ  
上々畑麻畑茶畑下々畑山畑砂畑其他適宜等級ヲ立  
テ石盛ハ地ニ應シ斟酌アルヘシ屋敷ハ古來上畑ニ  
准スルヲ以テ石盛ヲ上畑ト同フスヘシ  
屋敷ハ四方一間ヲ除クヘシ其外ハ竹木ノ有無ニ關  
セズ檢地スヘシ但小屋敷又ハ軒ヲ連ル隣屋敷等ハ  
斟酌シテ之ヲ除クヘシ  
畑ノ檢地ハ畑ノ四邊桑漆椿茶木アリテ高ニ入來ル  
所ハ畑歩ヲ除クヘシ

〔按〕桑漆椿茶ハ畑歩ニ入レヌ或ハ其獲ル所  
ニ准シテ高ニ結フ畑歩ヲ除ク所以ナリ  
田畑ノ石盛位付ハ隣村近郷ヲ照料シ甲乙ナキヲ要

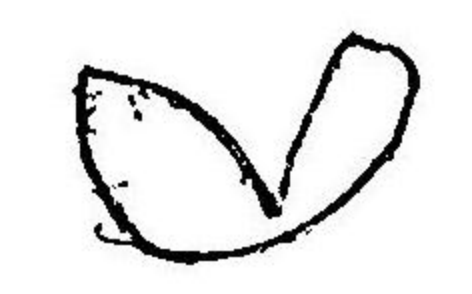


〔管繩〕管ヲ繩ニ  
貫キ地面ヲ丈  
量スルノ具管  
ハ以テ繩ノ伸  
縮ヲ防クナリ

スヘシ山方野方ノ村ハ差別アルヘシ旱水損傷用水  
懸リ日受ケ等マテヲ考ヘ地面ノ相當竝ニ收穫ノ五  
年平均ヲ以テ定ムヘシ  
畑傍ノ掘田ハ本歩ノ内ニ入ルヘシ竝 牧 民 金 鑑  
〔申御門天皇享保十一年五月〕徳川吉宗關東所々ノ新  
田畑ヲ檢ス牧 民 金 鑑  
〔同上檢地條例〕間年ハ六尺一分タルヘシ一段ハ三百  
坪タルヘシ  
繩ハ每一間ノ管繩長サ六十間或ハ三十間ノモノヲ  
用フヘシ繩ニ延縮アルヘキヲ以テ一日三次之ヲ檢  
スヘシ

〔内所〕廟墓ノ地  
ヲ謂フ

間數ノ奇零ハ六寸一尺二寸一尺八寸二尺四寸三尺  
三尺六寸四尺二寸四尺八寸五尺四寸トス此寸尺ニ  
足ラサルモノハ之ヲ捨テ算計ノ步詰一步ハ捨テ二  
歩ハ三步ニ足シ是ヨリ上ノ端歩ハ之ニ准シテ捨加  
シ畝ノ步ニ合スヘシ  
〔按六尺以下ノ尺寸ヲ算スルハ六ノ數ヲ用ヒ三  
十步以下ノ步數ヲ算スルニハ三ノ數ヲ用フル  
ナリ乃チ三步六步九步十二步十五步十八步廿  
一步廿四步廿七步一畝歩ノ十數ヲ立テ餘ノ奇  
零ハ則チ之ヲ加除シテ畝  
歩ニ適當セシムルナリ〕  
新田畑屋敷林畑ノ内上請允許ヲ得テ寺社ヲ建ル者  
ハ除地タルヘシ允許ヲ得サル者ハ檢スヘシ廟所ハ  
見捨地タルヘシ





〔兩毛作片毛作  
 拾及ヒ麥等ヲ  
 種ルヲ兩毛作  
 ト曰ヒ拾ノミ  
 ヲ種ルヲ片毛  
 作ト曰フ〕

晴除ハ一尺タル可シ類地モ晴際ハ一尺ツ、之ヲ除  
 クヘシ高晴等ハ適宜之ヲ除クヘシ  
 新田畑ノ位付ハ其村本田畑ノ位付ニ基キ上々ノ下  
 中々ノ下々ノ下皆一斗劣リニ定ムヘシ  
 漆茶桑楮等アルトモ其植物ニ關セス土地相當ニ致  
 スヘシ兩毛作片毛作ノ地ハ其差別ナク土地相應ノ  
 石盛ニ定ムヘシ並牧民  
 金鑑  
 〔光格天皇天明五年正月〕德川家治達諸國ヲシテ五穀  
 ノ外土地ニ宜キ物ヲ種植セシムヘシ牧民  
 金鑑  
 〔寛政九年四月十九日〕德川家齊達所在村々田畑成ノ  
 内段別少キハ取箇帳ニ組入レ上進スルノミニテ別

ニ稟問セサルモノ之アレトモ畑田成ニ異ナルヲ以  
 テ以來段別ノ多少ニ拘ラス伺書ヲ上進シ指揮ノ上  
 處置スヘク且村々土取り跡其外從前畑田成トナル  
 場所ノ内舊ニ仍リ畑方年貢ヲ納メ來ル類間マ之ア  
 ルノ趣右等ノ場所平素着意検査シテ異同ナキヲ要  
 スヘシ差田方掛留  
 記牧民金鑑  
 〔仁孝天皇文政元年十二月十二日〕倉自今本田畑ハ猥  
 ニ甘蔗ヲ作ルコト停止タルヘシ但荒地或ハ野山ヲ  
 開キ米穀不熟ノ地ニ作ルハ格別タルヘシ牧民金鑑  
 差田方掛  
 記留  
 〔田地總段歩〕



五畿內

山城國

田壹萬千四百五町八段三畝拾壹步貳釐  
畑六千四拾壹町壹段拾四步六釐

外

永荒田畑百三拾八町壹段四畝拾五步

大和國

田貳萬三千五百三拾壹町六段六畝拾步  
畑壹萬六百七拾七町壹段貳畝拾四步

外

山林境內田畑百八十七町六段五畝貳拾三步

河內國

田壹萬五千八百八拾五町六段壹畝拾貳步壹釐  
畑六千四百八拾四町七段四畝拾五步五釐

外

永荒田畑百七拾六町九段六畝三步

和泉國

田八千八拾四町四段五畝九步  
畑三千五百貳拾四町四段七畝拾九步

外

境內田畑貳拾五町六段六畝貳拾步

攝津國



田貳萬三千百九拾三町貳畝七步  
畑九千四百貳拾貳町五段拾壹步

外

永荒田畑貳百三拾五町貳段貳畝貳拾七步

東海道

伊賀國

田六千三百五拾五町壹段五畝拾九步

畑貳千三百八拾貳町壹段八畝貳拾三步

伊勢國

田三萬五千貳百七拾六町五段貳畝貳拾壹步三釐

畑壹萬九千四百拾四町四段四畝三步五釐

外

田畑百四町九段五畝九步

永荒田畑三百九拾九町五段八畝四步五釐

山林境內畑九町壹段八畝拾九步

志摩國

田千貳百九町五段六畝貳拾步

畑四百九拾七町壹段四畝拾壹步

尾張國

田貳萬七千六百七拾町六段七畝拾六步

畑壹萬八千三百四拾九町四段四畝拾九步



三河國

田貳萬千六百四拾九町壹段八畝拾九步

畑壹萬九千六百拾三町七段貳畝八步

外

永荒田畑百四町三段四畝拾壹步

遠江國

田貳萬千貳百七拾七町八段貳拾貳步

畑壹萬四千七百拾五町貳段三畝拾七步

外

永荒田畑三百九拾四町四段八畝拾三步

駿河國

田壹萬五千七百九町四段貳畝貳拾四步

畑壹万九百拾七町四段七畝貳拾七步

伊豆國

田五千四拾町貳段壹畝四步七釐

畑三千七拾四町五段九畝貳拾七步六釐

外

永荒田畑拾五町四段壹步

甲斐國

田壹萬五千七百四拾三町六段九畝拾九步五釐

畑貳萬九千三百五拾壹町四畝貳拾九步五釐

相模國



田壹萬三千三百八拾五町五段四畝貳拾五步  
畑貳萬九千百四拾三町壹段六畝貳拾六步

外

田畑五反八畝步

永荒田畑八拾九町四段九畝八步

境內田畑貳町步

武藏國

田六萬四千五百九拾町六段九畝三步

畑拾三萬七千貳百七拾八町九段四畝貳拾四步

外

田畑貳町五段三畝貳拾九步

芝地境內拾町壹畝壹步

永荒田畑四拾三町八段八步

安房國

田五千百九拾町八段八畝六步

畑四千貳百六町四段五畝貳拾壹步

外

田畑六段壹畝步

上總國

田貳萬五千三百九拾三町六段五畝六步

畑貳萬貳千九百三拾五町壹段八畝步

外



田畑五拾五町七段三畝貳拾四步

永荒田畑八拾壹町九段八畝七步五厘

下總國

田三萬七千四百四拾五町五段四畝七步

畑四萬貳千七百拾七町七段五畝拾貳步

外

田畑拾九町七段六畝拾四步

永荒田畑五拾七町壹段九畝貳步

境內六段壹畝六步

常陸國

田四萬九千七百七拾貳町壹段貳拾三步

畑六萬六千四百五拾五町四段壹畝貳步

外

田畑九町五段貳畝拾三步

永荒田畑四拾四町七段八畝五步

境內壹町四段八畝四步

東山道

近江國

田四萬八千五百三拾三町六步

畑壹萬四千三百四拾三町貳段三畝拾九步

外



田畑七町五段八畝貳拾三步

永荒田畑三百九拾壹町壹畝拾九步九釐

美濃國

田三萬三千九百四拾貳町九段壹畝貳拾貳步貳釐

畑貳萬貳千拾町七段五畝五步六釐

外

永荒田畑三拾八町四段貳拾九步

飛驒國

田三千八拾八町三段一畝四步

畑三千六百八拾七町三段貳畝拾步

信濃國

田貳萬七千四拾町壹段七畝七步

畑四萬貳千六百九拾八町貳段三畝拾貳步

外

田畑八拾貳町九段貳畝六步

永荒田畑貳千五拾四町六段五畝拾壹步五釐

上野國

田貳萬三千三百四町九段九畝拾八步

畑六萬四千貳百町七畝四步

外

永荒田畑拾町八段五畝六步七釐

下野國



田三萬五千五百八拾町壹段六畝拾三步  
畑七萬三千三町八段五畝拾八步

外

田畑貳段貳拾四步

永荒田畑三拾貳町七段九畝七步

陸奥國

田拾八萬三千六百四拾七町五段五畝五步

畑拾五萬四千百貳町壹段壹畝四步

外

永荒田畑貳千九百六拾町五段三畝貳拾貳步

出羽國

田八萬三千六百五拾貳町四段三畝步

畑三萬六千三百九町五段五畝貳拾三步

外

永荒田畑八百九拾七町六段拾六步

北陸道

若狹國

田五千四拾四町六段四步

畑貳千貳百拾三町貳段四畝壹步

越前國

田貳万六千四百九町壹段五畝九步九釐四毛



畑壹萬七百八拾六町九畝八步七釐

加賀國

田貳萬四千七百七拾町壹段貳畝貳拾壹步

畑七千五百七拾町八段貳畝貳拾壹步

能登國

田壹萬四千五百拾貳町七段六畝拾壹步

畑四千四百九拾三町七段九畝壹步

越中國

田四萬四千五百拾六町八段四畝步壹釐

畑七千四百拾壹町八段壹畝拾三步四釐

越後國

田六萬六千九拾三町九段三畝八步

畑四萬六百拾町六段六畝貳拾步

外

田畑百五拾四町三段六畝拾四步

佐渡國

田六千五百五拾四町九畝貳拾步

畑四千百六拾九町五段貳畝拾六步

山陰道

丹波國

田壹萬八千九百七拾五町五段三畝八步五釐



畑八千八百七拾八町壹段三畝貳拾三步五釐

外  
永荒田畑百拾六町五段貳拾六步

丹後國

田九千八百八拾五町貳段六畝拾八步五釐

畑貳千九百貳拾町七段四畝貳拾八步貳釐

但馬國

田八千七百拾貳町八段九步

畑三千貳百八拾貳町三段壹畝四步

外

永荒田畑八百六拾三町七段三畝拾五步

因幡國

田九千六百拾八町貳段五畝貳拾貳步五釐

畑貳千五百七拾六町九段貳畝貳步五釐

伯耆國

田壹萬貳千三百九拾六町四段壹畝九步五釐

畑三千九百八拾四町七段三畝貳拾七步

出雲國

田壹萬五千四百九拾五町壹畝拾九步八釐

畑四千九百拾六町壹段五畝貳拾貳步

石見國

田壹萬三千九百貳拾壹町六段壹畝拾七步



畑九千七百九拾七町壹段九畝拾九步

外

永荒畑壹町九畝五步

隱岐國

田六百貳拾八町五段九畝拾五步

畑三千三百四拾町九段貳畝八步

山陽道

播磨國

田三萬三千貳百八町五段貳畝拾八步七釐

畑壹萬五千四百貳拾六町四畝貳步壹釐

外

永荒田畑四拾貳町七畝拾八步

美作國

田壹萬貳千四百九拾九町九段七畝拾九步五釐

畑六千六百六拾九町壹段六畝拾六步

備前國

田壹萬七千百拾九町貳段九畝貳拾八步五釐

畑七千三拾壹町三段壹畝拾四步五釐

備中國

田壹萬七千三百三拾六町六畝七步三釐

畑壹萬貳千七百六拾貳町五段壹畝五步壹釐



外

永荒田畑三拾町壹段貳拾壹步

備後國

田壹萬八千貳百九拾町四段五畝四步

畑壹萬四千七百五拾三町六段五畝拾七步

外

永荒田畑貳拾五町三段八畝貳拾四步

安藝國

田壹萬九千七百四町貳段七畝拾三步

畑八千九百貳拾四町八段八畝拾七步

周防國

田壹萬九千五百七拾壹町四段九畝拾七步

畑壹萬八町貳段六畝貳拾步

長門國

田壹萬六千八百七拾町九段壹畝拾九步

畑六千九百六拾六町九畝六步

南海道

紀伊國

田貳萬五百五拾五町八段五畝三步

畑壹萬三千三百九拾九町六段五畝拾九步

淡路國



田五千九百拾五町六段九畝貳拾七步  
畑貳千七百町八段貳畝拾六步

阿波國

田壹萬千八百拾八町四段貳畝拾八步  
畑貳萬四百三拾九町九段貳拾四步

讚岐國

田貳萬貳千三拾六町五段八畝貳拾五步  
畑七千五拾町貳段三畝八步

伊豫國

田貳萬九千四百四拾四町五段五畝三步五釐  
畑貳萬貳千百拾七町貳段九畝貳拾貳步

外

永荒田畑貳拾町壹段壹畝貳拾壹步

土佐國

田貳萬千五百九拾町五段五畝拾八步  
畑壹萬千四百拾貳町九畝拾八步

西海道

筑前國

田三萬四千九百七町貳段四畝拾貳步三釐  
畑壹萬四千九百六拾七町貳畝拾三步貳釐

筑後國



田貳萬貳千三百三拾三町八段九畝壹步五釐  
畑八千貳拾四町四段壹畝五步

豐前國

田貳萬千八百九町貳段九畝五步四釐  
畑壹萬三百拾九町貳段貳畝貳拾九步四釐

豐後國

田貳萬貳千七百七町壹段八畝拾步五釐  
畑三萬五百四拾貳町七段貳畝五步

肥前國

田四萬七千六百七町九段四畝貳步八釐  
畑貳萬千三拾七町五段拾步六釐

肥後國

田三萬六千六百九拾八町八段四畝貳步  
畑三萬七千五百壹町七段四畝貳拾八步五釐

日向國

田貳萬千六百三拾壹町九段七畝貳拾八步六釐七毛  
畑貳萬百九拾三町九段貳步七釐九毛

外

永荒田畑貳百八拾七町七畝步

大隅國

田壹萬七百拾町八段拾貳步  
畑壹萬三千五百九拾六町八段七步



薩摩國

田壹萬六千六百八拾貳町七段五畝拾七步

畑壹萬五千七百四拾三町六段八畝九步

壹岐國

田九百拾八町貳段五畝拾八步五釐

畑千貳百七拾五町六段貳畝七步

對馬國

畑

田

町步下 紐帳

〔按〕本書ノ成ル蓋シ享保延享ノ間ニ在ルモノ、如シ然トモ未タ年月ヲ詳ニセス因テ此ニ掲ス各國段歩ノ合計貳百九拾七萬七百八拾町四段五畝拾貳步九釐但對馬ハ其數關クト雖モ五

六百町ニ過キス而シテ之ヲ古ニ比スルニ其數大ニ増加セリ蓋シ昇平日久ク諸國農作ノ業頗ル長進スルニ因テ然ルナリ

開墾田

〔按〕墾闢ノ業國家ノ要務トス是ヲ以テ古昔官能ノ之ニ從事ス爾來政綱漸ク弛ヒ其墾スル所概シ人民ノ私爲ニ係リ乃チ墾地トナリ名曰トテ源頼朝令ヲ下シテ東國不毛ノ荒野ヲ墾闢セシメ以テ公私ニ利益ス北條氏亦心ヲ此ニ用ヒ以テ之ヲ勸課ス足利氏ニ至テ封建ノ形租定リ各其方隅ヲ占メ墾墾日ナシ間マ墾闢スル者アルモ概シ人民ノ私墾ニ出テ官其事ニ與ラサルニ似タリ載籍ノ以テ徵スルニ至ルナシ德川氏ニ及テ運昇平ニ屬シ山間僻地ニ至ルマテ饑次ニ墾闢シ以テ公私ノ所有ト爲ス而シテ私ノ間或ハ紛議ヲ生シ動スレハ罪罟ニ罹ル者アリ故ニ之ヲ法ヲ立テ各其向フ所ヲ知ラシム文書以テ其要畧ヲ徵スヘキナリ



〔乃實〕解中篇ニ  
見エタリ

〔東國分〕東國武  
家ニ屬スル  
ノ地ヲ謂フ其  
地必シモ東國  
ニ限ラサルナ  
リ

〔後鳥羽天皇文治五年二月晦日〕總追捕使源賴朝〔令〕安  
房上總下總等ノ國々多ク荒野アリ而ルニ庶民耕作  
セサルヲ以テ更ニ公私ノ益ナシ宜ク之ヲ開發シ乃  
貢ニ供フ可シ〔東鑑〕

〔土御門天皇正治元年四月廿七日〕征夷大將軍源賴朝  
〔令〕東國分ノ地頭等新ニ水便ノ荒野ヲ闢クヘシ〔東鑑〕

〔承元元年三月二十日〕源實朝〔令〕地頭等武藏國ノ荒野  
ヲ開發ス可シ〔東鑑〕

〔後堀河天皇寛喜二年正月廿六日〕鎌倉府〔令〕武藏國太  
田庄ノ荒野ヲ新闢スヘシ〔東鑑〕

〔四條天皇延應元年二月十四日〕〔令〕武藏國小机郷ノ荒

野ヲ開發シ水田ト爲ス可シ〔東鑑〕

〔仁治二年十月廿二日〕〔令〕武藏野ヲ墾闢シ水田ト爲ス  
可シ〔東鑑〕

〔十二月廿四日〕〔令〕武藏野ヲ開發シ多麻河ノ水ヲ引キ  
水田ト爲スヘシ〔北條九代記〕

〔慶長二年三月廿四日〕長曾我部元親〔制條〕新林年荒  
闢キ新闢竝ニ鹽田等ハ上聞ヲ遂ケ下知ヲ以テ之  
ヲ闢クヘシ内々開發ヲ爲シ隠シ置クハ停止タル

ヘシ〔長曾我部元親百箇條〕

〔東山天皇貞享四年〕征夷大將軍德川綱吉達町人請負  
ノ新田畑ハ向後停止タルヘシ然リト雖モ極テ然ル

〔下知〕猶指揮ト  
言フカコトレ



ヘキ縁由有ル所ハ相議スヘシ牧民金鑑

〔按〕町人請負新田トハ商賈某所ノ地ヲ負荷シ開スルヲ謂フ又村受有リ村人協議シテ之ヲ開スルナリ各銀下年期ヲ定メ年期中ハ免租トス又見立新田ノ事有リ乃チ代官勘定役普請役等開墾スヘキ場所ヲ見立テ他ニ障礙無ク成功シ銀下年期ヲ過キ地租ヲ賦スルニ至リ其十分ノ一ヲ下賜シ以テ之ヲ勸誘ス是レ

〔中御門天皇享保六年六月〕德川吉宗達新田開成ハ嘉

ミス可シト雖モ他ノ害ト爲ラサルヲ要スヘシ屢古

田畑或ハ秣場等ニ障礙スルコト有リ斯ノ如キ所ハ

施爲スルコト勿レ教令類纂

〔七年七月〕高札諸國料所又ハ私領ト相接スル所ト雖

モ新田ト成ル可キ場所所有ラハ其所ノ代官地頭並ニ

〔私領〕諸家ノ新地ナリ

百姓協議シ新田開發ノ方法委細圖書ニ記シ五畿内

ハ京都町奉行所西國中國ハ大阪町奉行所北國關八

州ハ江戸町奉行所ニ願出ツヘシ若シ願人或ハ百姓

ヲ欺キ或ハ金主ノ者ヘ巧ヲ以テ勸メ利ヲ貪ルヲ專

要トシ偽リ申出ルモノアラハ検査シテ之ヲ譴責ス

ヘシ牧民金鑑

〔按〕開關ノ方法は時ニ至テ略定ル畿内西國中國北國關東ヲ分テ三府ノ町奉行ニ願請セシム町奉行之ヲ選送シ勘定所ニ於テ熟察シ以テ其可否ヲ決定ス

三十日〔達〕各代官所ノ内新田畑ト成ルヘキ場所所有テ

普請等ノ作方ヲ以テ開發ス可キノ處公費ヲ待タス

百姓費用ヲ辨シ開成スヘキ場所ハ申稟ヲ須タス速



ニ開發セシメ其趣追テ上申スヘシ勿論外村等關障  
ノ有無ヲ實驗シ關障無キコト決定ノ上タルヘシ然  
トモ他所ノ商人等請負ノ開發ニテ其所ノ百姓トモ  
協同セス町人ノミノ請負新田ハ委細書附ヲ以テ稟  
問スヘシ類纂 教令

〔按〕普請トハ修繕ヲ謂フ河身ノ屈曲スル者修理  
シテ之ヲ直クスレハ水害ヲ除キ且若干ノ田地  
ヲ得ヘシ所謂瀬邊新田等是ナリ或ハ沼池ノ淺  
行無用ニ屬スル者堤塘ヲ修築スレハ則チ若干  
ノ田地ヲ得  
ヘキナリ

〔九月廿九日〕令自今新田開發スヘキ場所ハ檢査シテ  
障礙無キニ於テハ開發セシム可シ右地所私領村附  
ノ地嘴ニテ從前開發スヘキモ此回新田ヲ檢査シ未

〔東金〕上總國市  
原郡ニアリ

タ開發シアラサル場所ハ山野荒地等或ハ海邊出洲  
内川ノ類新田畑ト成ルヘキ地所ハ公儀ヨリ開發ヲ  
命スヘシ私領ノ内開クヘキ新田ハ公儀ヨリ關係之  
ナシ牧民  
金鑑

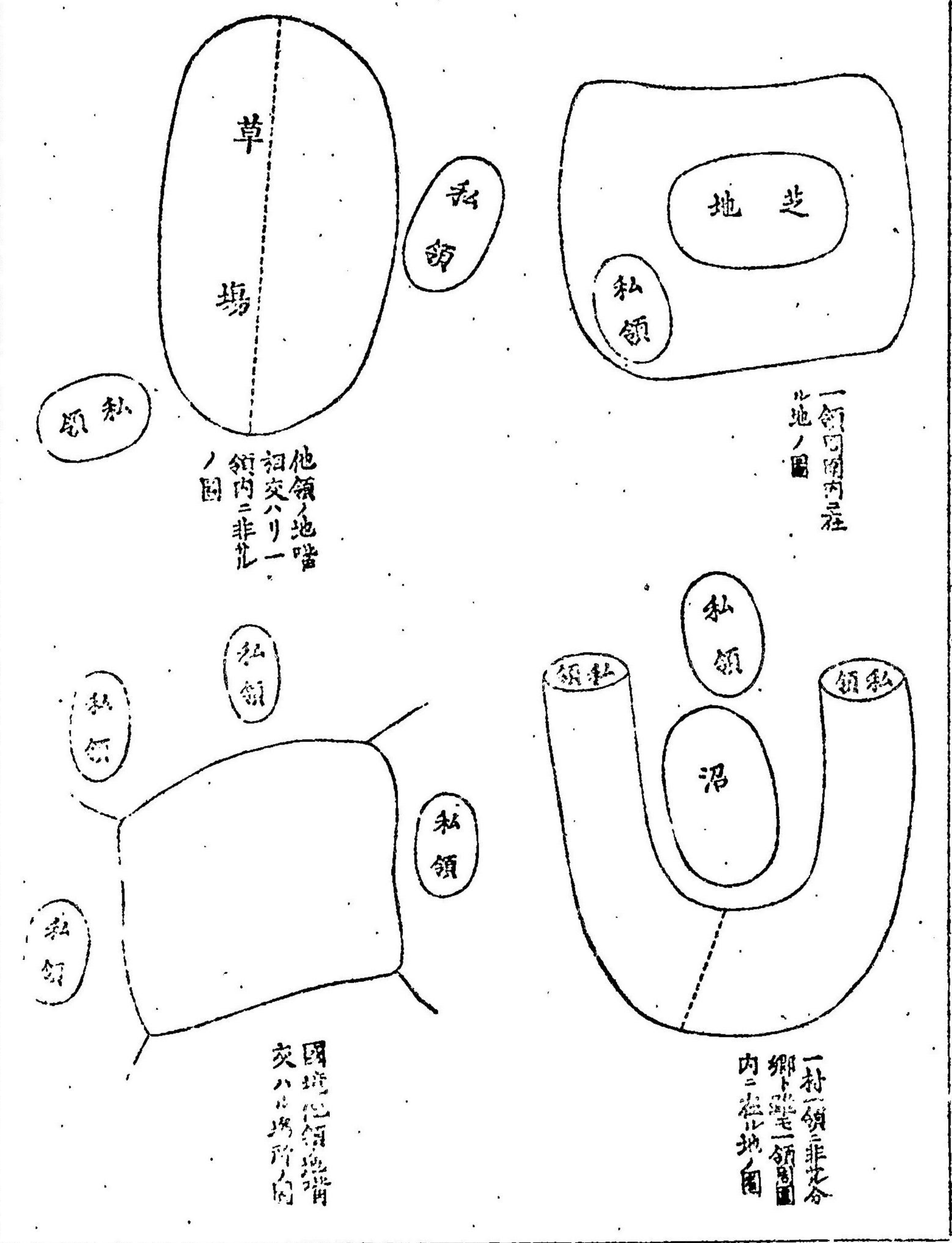
〔同月〕達東金ノ内糞ニ地頭ヨリ開發ノ新田ハ以後モ  
年貢地頭ヘ收納スヘシ尤モ自今以後公儀ヨリ新田  
ヲ命スル分ハ私領ノ地嘴ト雖モ年貢公儀ニ上納ス  
ヘシ放令類纂有  
徳院殿實記

〔桃園〕天皇寶曆七年四月十六日〔徳川〕家重指令新田開  
發ニ付享保中達セシカ如ク全ク私領内ニ在ルノ地  
萬石以上以下トモ其地内ニ在ル場所ハ公儀ヨリ新



〔他給他人ノ領地ナリ〕

開ヲ命セス但一村一領ニ非サル分郷ニテモ一領周  
 圍内ニ在ル地ハ之ニ同シ  
 他給ノ地嘴少々ニテモ交ハルモノハ一領内ニ非サ  
 ルヲ以テ公儀ヨリ新聞ヲ命ス但一國內ニ非サル國  
 境ニシテ他國ノ地嘴交ハル場所モ之ニ同シ  
 海邊出洲寄洲等モ前ニ同シ  
 〔按此書ハ該年三月勘定奉行吟味役ヨリ京問  
 ニ指令シタルモノニシテ左ノ圖ハ京問書ニ副  
 ヒタルモノナリ今事實了解シ易  
 カラシメシカ爲メ之ヲ附録ス〕





〔野錢〕解中篇ニ見エタリ  
〔山手〕同上  
〔花上〕淤泥ノ乾

〔後桃園天皇安永元年四月〕德川家治達田畑新開願人之アル時検査ノ上村受ヲ願フトキハ之ヲ命スト雖モ願人徒勞ト爲ルヲ以テ自ラ新開ヲ願フ者之ナシ畢竟開發スヘキ場所ハ其村ヨリ速ニ申立テ検査ヲ受クヘシ然ルニ願人之アリ検査セシ上ニテ村受ヲ願フハ其村百姓ノ等閑トス因テ向後ハ願人有ルノ後村受ヲ願フトモ其仕法同一ナレハ之ヲ許サス因テ其意ヲ體シ新開スヘキ場所ハ即チ其村々ヨリ願出ツヘキ旨ヲ指揮スヘシ牧民金鑑  
〔四年十一月廿六日〕達入會秣場野錢場山手等收納ノ場所或ハ附洲乾上リ等新田畑開發成ルヘキ場所ハ

ケル地ナリ

懈怠ナク検査スヘキ旨前々申達シ施行セリト雖モ前々裁許有リタル場所ハ先裁許ニ拘リ検査セス或ハ検査スト雖モ村々ノ上申ニ拘リ因仍セル所モ之アリ先裁許有リタル場所ト雖モ現在ノ事狀ヲ検査シテ新開ト成ルヘキ場所ハ之ヲ開發スヘキヲ以テ右裁許繪圖證文ヲ熟査シ其趣ヲ以テ開申スヘシ牧民金鑑勸要雜記  
〔六年九月二十日〕御觸留牧民金鑑教令類纂○事實 曆七年四月ノ指令ニ同シ之ヲ略ス  
〔光格天皇寛政十二年三月廿六日〕德川家齊令諸國川筋連々埋リ水行惡キヲ以テ自今已後諸國トモ公料



私領ニ限ラス川通りノ附洲ヲ新開スルハ勿論葭眞  
菰等ヲ植出スコト勿レ追々生殖ノ場所ハ刈拂ヒ附  
洲トナラサルヲ要スヘシ牧民金鑑御書  
附留公文雜集

〔仁孝天皇天保十四年六月〕德川家慶達新田場年數已  
ニ過キ地位改良ノ類多ク之アルヲ以テ免直シ等ヲ  
檢シ事實ニ當ルヲ要スヘシ牧民金鑑

〔孝明天皇安政四年四月〕德川家定令國々ニ於テ新田  
畑開發全ク一領内ニ在ル場所ハ公儀ヨリ新開ヲ命  
セサル旨享保及安永中布令ノ趣旨モアリ且又諸國  
川通り附洲ヲ新開等爲ス可ラサル旨寛政中布令セ  
シ趣旨モ之アル處當今武備斡旋ノ際全ク一領内ニ

〔起返〕荒蕪地ヲ  
回復スルヲ指  
ス

〔一輪〕一人ノ知  
行所ナリ

在ル川附ノ寄洲ト雖モ洪水等ノ時前後村方ニモ全  
ク關障有ラサル分ハ私領ニテ新開ヲ命スヘシ關障  
有無分明ナラサルトキハ勘定奉行へ照會スヘシ因  
テ領主地頭之ヲ檢覈シ新開並ニ荒地起返スヘキ場  
所ハ開發シ以テ永世ノ收納額ヲ増シ武備ノ一助ト  
爲スヘシ但一村一給ニ非サル分郷ニテモ一給ノ周  
圍内ニ在ル地所ハ同前尤モ他領ノ地嘴交接スルノ  
地ハ私領ニテ開發ス可ラサル等ハ安永中達ノ如ク  
領會スヘシ御願

〔五年五月〕德川家茂令新開場ヲ檢シ石盛中稟ノ際屋  
敷ノ分地位劣レル旨ヲ以テ他村ノ屋敷ニ照准スル



モノアレントモ以後屋敷石盛ハ假ヒ他位ヲ低下スル  
 ノ例アル村方タリトモ其例ヲ廢シ地味ノ厚薄ニ拘  
 ラス檢地條目ノ旨趣ヲ以テ其村上畑石盛ニ准シ調  
 査スヘシ但特ニ畑方石盛ノ低キ定例アル村々ハ之  
 ニ准シテ申稟スヘシ御留

荒損田

按鎌倉府以來海内騷擾民其塔ニ安ンセス田園  
 ノ荒廢所在往々之アリ後醍醐天皇再祚ノ時ニ  
 至テ不堪佃田ヲ奏スルノ典ヲ再興ス未タ幾ナ  
 ラスシテ足利氏國柄ヲ執リ此法遂ニ廢ス爾後  
 至リ稍起返ノ倍シ田園ノ荒蕪此ニ極ル徳川氏ニ  
 故ニ年々農吏ヲ督促シテ享保以來其法大ニ備  
 其回復ヲ期セシメ屢之ヲ告諭スルコト枚舉ニ

遑アラヌ是ヲ以テ荒損ノ起  
 返ルモノ頗ル多キニ至レリ

〔文治五年五月〕東寺領弓削庄檢注目録見作島貳拾

陸町參段半ノ内損畠壹町五段小得畠貳拾四町八

段六拾步東寺百合  
古文書

〔曆應三年十二月〕東寺領垂氷莊内檢目録總田畠ノ

内損田八町三段小三十五步旱田十町四段小十五

步得田十四町二段小四十步東寺百合  
古文書

〔土御門天皇正治元年四月廿七日〕左近衛權中將源賴

家令凡ソ荒不作ト稱シ乃貢減少スルノ地ニ於テハ

向後領掌ヲ許ス可ラス東

〔按當時綱紀疎緩更民發給荒不作ト稱スル其實  
 否ナル者アリ故ニ一般之ヲ禁ス便チ之ヲ勸ム

〔内檢〕解雜篇ニ  
 見エタリ



ル所以ナリ

〔後醍醐天皇建武元年九月七日〕不堪田ヲ奏ス建武年中行事

〔貞治四年六月廿七日〕尾張國中島郡地頭泰隆證券

福重保ノ内荒野河成不作等拾貳町漆段半直錢陸

拾貫文ヲ以テ妙興寺ニ沽却ス元ヨリ荒野等ノ地

タルヲ以テ公家役武家役私ノ加徴等萬雜役承ク

之ヲ閣ク者ナリ尾張國妙興寺文書

〔寶徳二年十一月十九日〕東寺領大和國河原城取代

官請文地下興行ノ田畠段歩タリト雖モ隱密無ク

必ス相當ノ年貢ヲ増ス可シ東寺百合古文書

〔文明十五年六月十一日〕東寺領播磨國矢野庄代官

〔河成〕田畑洪水ニ災損シテ河トナリタル者ヲ謂フ

〔地下〕和加采ニ云王人ノ外ヲ謂フ天上殿上ニ對スル語ナリ猶民人ト言カコトシ

〔興行〕開墾或ハ荒廢地ヲ其ニ從スルヲ謂フカ  
〔公用〕年貢雜事ヲ謂フ

〔越度〕度ヲ越ユルノ義猶過失ト言フカコトシ

請文河成以下ノ田畠興行アラハ公用ヲ加増シテ寺ニ納ム可シ東寺百合古文書

〔後陽成天皇文祿三年〕關白豐臣秀吉制條作來ル田地ハ言フニ及ハス他人ノ田畠タリト雖モ先ツ其主ニ

告テ猶將ニ荒レントセハ耕作スヘシ主無キ田地並ニ奉公人手作ノモノ荒ル、ニ於テハ總作リト爲ス

ヘシ都テ荒地アラハ其在所ノ越度タルヘシ豐後國利光村文書

〔慶長二年三月廿四日〕長曾我部元親制條國中村々ノ荒田在所ノ庄屋荒ラス可ラサル旨ヲ申付クヘシ但料簡無キ者ハ奉行ニ報シテ修理ヲ加フ可シ



〔引高〕地所荒廢  
等ニ因テ本高  
ノ内ヲ減スル  
ヲ謂フ

右ノ旨油斷ヲ爲シ荒ル、ニ於テハ其在所ノ庄屋  
作人ノ貢物ヲ償フヘシ

長曾我部元  
親百箇餘

〔中御門〕天皇享保六年閏七月征夷大將軍德川吉宗達  
永荒ノ地引高ノ内勉力セハ起返ルヘシ然ルニ其地  
主ノ力ノミニテハ起返期シ難ク徒ニ年月ヲ過コス  
ノ聞エアリ右等ノ分其村中協力シテ起返スヘシ若  
シ其村中ニテ成シ難キ分ハ勘査シテ官之ヲ修理ス  
ヘシ若シ巨費ヲ要セハ稟申スヘシ其地ノ貢租二三  
年或ハ四五年モ之ヲ免除シ年期過クレハ地位ニ應

〔取置〕解中篇ニ  
見エタリ

シテ貢租ヲ賦スヘシ牧民金銀有  
徳院殿實記

〔按〕起返高入ノ事ハ享保以後屢督責ノ令有リ正  
徳ヨリ慶長ニ溯リ百有餘年ノ間絶テ其文ヲ見  
ス蓋シ徳川氏ノ始百事簡易或ハ其事アリテ  
其文無シ各種皆然リ當是ノミニ非サルナリ

〔七年十一月〕達永荒田畑ノ回復ノ地勘査ヲ遂シ取置  
遺漏ナキヲ要スヘシ總テ永荒ノ場所紛雜ノ事有ル  
ヲ聞ク時宜ニヨリ検査ノ者ヲ遣スヘク代官ニ申達  
シ來春ニ至リ明細勘査スヘシ教令  
類纂

〔十五年九月〕達定免村ノ内永荒ノ地起返些少ナルモ  
租米金其年ヨリ收入シ來レトモ向後ハ農民持高ノ  
内縱ヒ拾石荒ノ所高壹石起返ルモ米金其年ヨリ徵  
收スヘシ拾石荒ノ所ニテ壹石以内起返ノ分ハ代官



大日本地租見本 卷之十 四十八 大磯省

所預所ニテ<sub>レ</sub> 勘査シ定免年季切替ノ時高收稅共ニ之  
ヲ増スヘシ細民ノ荒地高拾石内ニテ起返ノ割合亦  
右ニ同シ

定免年季ノ内川欠山崩荒地引方モ農民一人分持高  
拾石之アル内壹石荒地ト成ラハ之ヲ減スヘク壹石  
ノ内荒地ノ分ハ減スヘカラス定免ノ如ク米金ヲ徵  
收スヘシ開傳 聚書

〔桃園天皇寶曆三年八月二日〕德川家重達近年荒地起  
返等ノ勘査明細ナラスト聞ク今年ハ檢見時節ヨリ  
早ク發出シ村限荒地起返ヲ熟檢シ府ニ歸テ稟啓ス  
ヘシ牧民金鑑 差出方掛留記

〔註〕總領ヲ開

〔四年七月十九日〕達荒地起返ノ事特別變地ノ外石砂  
入些少ノ川欠等ハ百姓ノ精力ニ依リ速ニ起返ルヘ  
シ右勘査ハ從前屢申達セシヲ以テ懈怠無カルヘケ  
レトモ以後猶厚ク心ヲ用フヘシ是マテハ起返高ヲ  
取箇帳ニ添ヘ差出シ翌春ニ至リ高辻ヲ聞置クノミ  
ナレトモ今年ヨリハ檢見濟取箇帳上申前ニ當年分  
起返高ヲ錄シ呈進スヘシ差出方掛留記

〔五年六月十六日〕達荒地ヲ勘査スルコト一村限小前  
帳ヲ製セシメ毎年起返ノ理由ヲ明細ニ勘査スヘシ  
差出方掛留記

〔七年七月〕達荒地起返ヲ毎年檢査シ村民ノ力ニテ起



〔退轉遺百姓〕實  
田等ニテ其村  
ヲ退キ他ニ流  
轉シ又ハ一戸  
斷絶スル百姓  
ヲ謂フ

返ルヘキモノハ勵精セシメ怠惰ナルモノハ其地ヲ  
收取シテ他ノ請願者ニ交付スヘキ旨ヲ告テ勉強セ  
シムヘシ人少ク力及ハサルノ地ハ闔村ヲモ協力セ  
シメ且又費用多ク容易ニ起返シ難キ地ハ其段別ノ  
取箇ト起返スヘキ役夫ノ多少等ヲ調査シ意見ヲ啓  
稟スヘシ急ニ成功シ難キノ地ト定テ放棄スヘカラ  
ス毎年手代ヲ差遣シテ審査セシムヘシ差出方掛留  
記牧民金鑑  
〔十二年十月十五日〕徳川家治達常州筑波郡ノ内四个  
村退轉遺百姓ノ田畑手餘荒地ト成レル分高合六百  
貳拾壹石餘此減米貳拾貳石餘永八拾壹貫文餘外一  
个村林下草永六百文餘當午年ヨリ來ル子年マテ七

〔手餘地所度ク  
レテ耕作ノ力  
及ハサルヲ謂  
フ  
〔林下草永〕解中  
篇ニ見エタリ

〔不持〕不法ノ附  
ナリ

年間取箇ヲ免除シ其村又ハ近村ノ内田畑ヲ所有セ  
サル百姓ニ授與シ年季内怠リナク調査シテ之ヲ起  
返シ村中ヲシテ其舊ニ復サシムヘシ但荒地起返田  
畑町步竝ニ人別増加等ノ事每次取箇方へ上申スヘ  
シ牧民金鑑差  
出方掛留記

〔後櫻町天皇明和五年六月十四日〕達石砂入僅少ノ川  
欠等ハ百姓ノ精力ニ因リ速ニ起返スヘシ然ルニ毎  
年引高増加シ起返少キハ畢竟勸査密ナラサル故ナ  
ラン久キ荒地ノ内ニハ書面ノ地ト符合セサルモア  
リ或ハ近年ノ荒地速ニ起返スヘキ場所モ勸査ノ際  
永荒ノ場所ト詐唱セル村モアリ甚々不持ノ至ナリ



以來村々小前帳ヲ巨細ニ區分シ明了ナル諸帳簿ヲ製シ置クヘキ旨ヲ村役人ニ申達シ猶又各自巡村ノ時ハ手代ニ起返怠ル可ラサル旨ヲ説諭シ實ニ急速ノ起返ニ至リ難キ地ハ此後起返ルヘキ期限ヲ勘査シテ稟報スヘシ

差出方掛留 記 牧民金鑑

〔後桃園天皇安永四年閏十二月廿八日〕達石砂入等ノ荒地或ハ石河原等ニテ耕作成リ難ク本畑ノ内起返リ難キ地又ハ原地空地等ノ内ニモ地味アシク新闢成リ難キ場所等ハ茶種ヲ播種セハ多少百姓ノ作益アルヘキヲ以テ速ニ地所ヲ點檢シテ明春播種セシムヘシ茶ハ肥養ノ力ヲ勞セス自生セシモ收實有ル

モノタレハ篤ク村民ニ諭達シ多ク油茶ヲ播種セシメ又ハ茶種ニ限ラス蕎麥ノ類モ之ヲ播種シ土地ヲ荒廢ニ委棄ス可ラス

牧民金鑑

〔光格天皇天明八年十一月十八日〕德川家齊達陸奥常陸下野下總ノ四國近年手餘荒地多ク困窮ニ墮ヒ難散セシ者少カラス或ハ出テ、僕賃等ヲ爲シ村民減少シ彌荒地ヲ増セリ右荒地起返ノ爲メ他國ニ散出スル者其外無産ノ者等村々ノ豪民之ヲ保抱シ或ハ雇作ヲ以テ農業ヲ爲サシメ荒地畝下幾年ニテ起返スヘキ目的ヲ立テ農具代夫食等ヲ欠ク爲メ礙滯スルモノハ公費ヲ積算シテ申稟スヘシ且殊ニ精勵起



返ノ功速ナルモノハ褒賞アルヘキヲ以テ精細心ヲ  
用ヒ公費少クシテ起返方ノ便宜爲ク勘査ヲ遂ケ各  
支配代官預所役人其意見ヲ稟啓スヘシ 差出方掛留  
記牧民金鑑  
寛政元年閏六月五日達奥州ノ内手餘荒地ニ無罪ノ  
無籍人ヲ差遣シ入百姓トナシ濫ニ離散セシメサル  
カタメ其片鬻ヲ剝去シ暫時ノ間ハ夫食其外相當ノ  
給料ヲ與ヘ勉強ノ者ハ逐次高持トナシ片鬻ヲ蓄ヘ  
宗門村籍ニモ加ヘハ漸次荒地起返増加スヘシ但入  
百姓ハ庄屋ノ内才幹ニシテ財産アリ能ク人ヲ誘導  
スルモノ等ニ給料ヲ與ヘ右ノ荒地ヲ請田トナシ各  
無宿人兩三名ヲ保庇幹旋シテ起返サシメハ周到ス

〔入百姓〕他所ヨ  
リ入テ耕作ス  
ル者ヲ謂フ  
〔高持〕田地ヲ右  
スルヲ謂フ

〔請田〕負荷スル  
田地ヲ謂フ

ヘキヲ以テ村民ヲ審査シ各人ノ意見ヲ稟啓スヘシ  
差出方掛留  
記牧民金鑑

〔五年二月〕達總テ荒地起返ノ旨趣ハ民力ヲ振起スル  
ヲ專要トナシ其地ニ因テ思慮ヲ竭スヘキハ論ナク  
町歩ノ多少土地ノ善惡ニモ因ルヘシト雖モ僻ヘハ  
荒地拾町歩ノ内壹町歩起返直ニ免直ヲ爲セハ殘町  
歩起返スヘキノ勇力ヲ折クノ理タリ起返ノ初ハ至  
テ低免トナシ追テ地味復シ起返費用モ補理スヘキ  
景况ヲ察シテ之ヲ説諭シ追次其土地相當ノ免ニ改  
ムヘシ若シ十五年或ハ二十年モ起返改良ノ地ヲ最  
初ノ下免ト爲シ置カハ他ノ無難ノ田畑ヲ所有セル